

ようこそ超人が支配する教室へ

口の端にほっぺが！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Bクラスに実力主義で人を操ることが大好きなリーダーを放り込みます。

顔よし頭よし身体能力よし社会性よし。

一之瀬を参謀にしてBクラスを最強にしちやおう!!

バタフライエフェクトで原作から離れていく様をお楽しみください。

Bクラス独自の展開を多めに盛り込む予定です。

エタらないように勢い重視でいきます。

いつてらっしやーい。

※性的な行為を示唆するような表現があります。直接的な表現はありませんが、ご注意ください。

※「ようこそ狂愛主義の教室へ」に感化されて書きました。

目次

原作一巻相当

入学	1
違和感	21
交流	34
プライベートポイント	54
ささくれ	74
前触れ	89
走り出し	105
一歩	129

原作一卷相当

入学

「実力主義」とは一体何を指すのだろうか。

自らの能力を行使して、結果を出した者が正当に評価されるべし。そんな考えだ。結果を導き出せる要素というのが、「実力」という訳だ。

そうすると、実力とは実に多様に存在することに気づく。

オリンピック選手は運動能力やメンタリテイ。学者は思考力に想像力。大企業の社長であれば運営力、新進気鋭のベンチャー企業はリーダーシップや洞察力など。

多方面で結果を出そうとすれば、それぞれ無数の実力を必要とする。

最近は特に注目されている話だし、各々の得意な分野を伸ばすためのフリースクールなども加速度的に増えている。

世界的にもその流れに遅れを取っていた日本も、ついに動き出した。

高度育成高等学校。

日本政府が直々に作り上げた、東京湾に浮かぶ大きな施設。

学校内部の情報や、その教育の仕組みなどは一切伏せられながらも、進学率・就職率

100%を誇る、謎に満ちた学校。

ここでは計画的に生徒の実力を伸ばし、様々な方面で著名な人物を輩出してきた。実に画期的で、「実力」のある学校なのだ。

そこに通うことになる生徒たちも、実にバラバラで、個性的な実力を有していることだろう。

そんな奴らを自分の思うように操る、手の上で転がすとしたらどれほど気持ちがいいか。

そして、俺には彼らを操れる実力が本当にあるのか。

きつと素晴らしい高校生活になる。自らを見直す最大の機会になる。

俺は、この学校で一番の実力者になるのだ。

伊王野美颯が、学校を支配するのだ。

☆

がたん、とバスが揺れる。目を覚ました。

寄りかかっていた窓の外にはピンク色の風が吹き、その奥で無機質な建物が流れていく。

ゆっくりとバスが走行する中で、道行く人影が見えた。新年度が楽しみな学生。友達と楽しそうに会話する主婦。ベビーカーの中で幸せそうに眠る赤子。

体を起こして、あとのついた頬を撫でた。

バスの中に目をやると、乗車してから人が増えたようで、前方ではつり革すら満員の様子だ。会社員や高齢者、更には制服姿の生徒も目に入る。同じ高校の生徒だろうか。

真つ赤なブレザーに、男子は緑色のズボンと女子は真つ白なスカート。俺と同じ格好をした彼らは、まさしく「高度育成高等学校」の生徒のはずだ。

緊張した面持ちの生徒や、居眠りをする生徒。しんと静まったバスの中で、彼らはバレないように息を潜めているようにすら見える。

こいつらが、同級生なんだろうな。

俺はそれとなく彼らの顔を見やる。彼女ら——つまり女子の顔を値踏みするように流し目を送り、そつとほくそ笑む。

可愛い子多いな。

うしつうしつと、心のうちでガッツポーズをした。おそらく高校の間でも、有意義に彼女たちを楽しむことができるのだろう。妄想をしつつ目を瞑る。

「どうぞ。この席に座ってください」

優しい声が響いた。

目を開けると、バスの前方でピンク色の髪の毛の女子生徒がご老人に席を譲っている。譲られたほうは、ちょうど今乗ってきたらしいのだが、嬉しそうにお礼を言っていた。

暖かい雰囲気、周りの人も微笑みを浮かべる。譲った彼女も、お礼を謙虚に受け取り、特に違った感情を見せることなく微笑みを浮かべたままだった。

なかなか勇氣のある子じゃないか。いたたまれなくなつた、といった理由などではなく、純粋な優しさから行動を起こしたような、躊躇いのない様子が伺える。

俺は彼女を注視する。

一瞬遅れて、彼女も俺のほうを向き、目が合った。キラキラとした水面のような瞳が俺を見つめる。彼女は、にこりと微笑んで笑顔を向けた。

俺も同様に笑顔を返す。心の中で阿波踊りをしながら。

フウ！めっちゃ美人じゃんか。

いいものを見た、と俺はさらに口角を上げた。

「ねえ君、ここにちは！」

バスを降りて歩くこと数秒。前方から声がかげられた。

相手はピンク色の髪の女の子。さつきの子だ。ニコニコと嬉しそうに笑顔浮かべ、小さく手を振っている。

「やあ。君も1年生か？」

「うん！『も』っていうことは君もなんだね」

嬉しそうにオーバーな頷きをする彼女は、隣を歩きながら話を続けた。

「私は一之瀬帆波。よろしくね！」

「俺は伊王野美颯だ。こちらこそ、これからよろしくな」

お互いに優しく笑みを浮かべながら、隣を歩く。帆波の小さな歩幅に合わせてつ、俺は先程のことを思い出した。

「さつきのこと、なかなか普通の人にはできることじゃないな。帆波の優しい性格が垣間見えたよ」

「にやはは。当たり前のことをしただけだよ」

照れたように、くすぐったそうに笑う。どこかほっとしたような表情を一瞬だけ見せて、満足したように顔をあげる。同時に正門をくぐった。感慨深そうに帆波は呟いた。

「……これから3年間、ここで生活することになるんだよね」

高度育成高等学校。

進学率・就職率100%をうたう、政府直々に作られたこの学校は、普通の高校とは一線を画す受験倍率からわかるように、ほかとは全く異なった学校である。

広大な敷地。いくつかの巨大な校舎。大量のお金をかけられた設備の数々に日本最高峰レベルの教師。

勉強するのにこれ以上ないほどシステムが整えられている。

そして、それは学校の中では収まらない。

隣接する学生寮はそこらのアパートなんかよりも充実した施設となっており、入学した生徒はそこで3年間過ごすこととなるのだ。

無論、欠点もある。

3年間この敷地内で過ごすため、実家に帰ることは出来ない。それどころか、学校に許可をとらない限り外の世界と連絡することすら出来ない徹底ぶりだ。ホームシックを患おうが、故郷に親友彼女がいがいが、3年間の別れを必要とする。

その代わり、上記を覆ってあまりあるメリットも存在する。

高度育成高等学校を要する人工島。その実態は、学校を中心とした小さな街となっているのだ。大手ショッピングモールに様々な店。ラウード・ワンがあれば叙〇苑すらある。生徒が生活に困らないように、ブティックやらカフェやらが、その60万平米を超える敷地に詰め込まれているのだ。

そんな夢の島で生徒が目指すのは、あらゆる分野での実力者。

3年間で学力のみに収まらない能力を伸ばし、日本の未来を背負う人物を輩出するのがこの学校の目指すところだ。

故に、今までのように定期テストだけに収まることはないのだろう。様々な条件下で身体能力や判断力、果てには今まで知ることのなかった力を試されることになるはずだ。

「ああ。——高度育成高等学校か。どんな学校生活を送ることになるんだろうな。実に楽しみだ」

目の前には大きな大きな校舎。威風堂々その威容を露わにするその学校は、俺の心を強く揺さぶる。

「うん。どんな人がいるのか、すごく楽しみだよ」

周りでは、俺と同じ新入生が歩みを進める。期待。緊張。不安。自信。様々な感情の入り交じった彼らの表情は、まさに俺と同じなのだろう。

よし、と小さく喝を入れて俺は足を踏み入れた。

昇降口からさほど遠くない1年の教室は、クラス発表の掲示板から数十秒の場所に
あつた。

1—B。

Aクラスのすぐ隣のドアをくぐる。

気分的にAクラスが良かったのだが、これが抽選で決まっているのなら詮無いこと。
多少残念な気持ちになつていたが、今やウキウキの裏側に消え去つている。

運良く俺の名前の下に名前があつた帆波と共に教室に入つた。

「よっすー」

「こんにちはー」

同時に教室内への挨拶が出た。まあ、帆波のような人物ならそれが当たり前か。注目を引いて、彼らと話すきっかけを作る。

最初の絡みが大切というのは、どこの誰もが当たり前に抱く考えなのだろうな、なんて思いながら、自分の席を確認しつつ目が合った男子に近づいていった。

教室のど真ん中。

「よー」

「おすー」

と明るく返事を返してくれたのは、無邪気な笑顔を浮かべる快活な青年と、マツシユヘアの目が細い青年だ。軽く手をあげている彼らは、座っている机の名前を思い出す限り、柴田^{そう}颯と渡辺紀仁のはずだ。

「やあ。伊王野美颯って言うんだ。美しい颯で美颯。よろしくな」

軽く自己紹介して右手を伸ばす。利き手は左だが、こういう場面では右手を出す方が好ましい。

「渡辺紀仁。糸に己、人が二人で紀仁。これからよろしく！」

マツシユの紀仁はにつこり笑って握手を返してくれる。腕に程よく筋肉がついていた。細身なのを考えるによく鍛えられた筋肉をしているのだろう。

そうして、体の向きを変える。

てつきりいの一歩に挨拶をするかと思った颯を見ると、驚いたように目を丸くしていた。

「伊王野美颯…？もしかして、去年の優秀選手だったり？サッカーのさ、全国大会の！」

おや。それを知っているということは同じサッカー部だったのだろう。一部では有

名な話だから、この学校でも数人は気づくのかもされない。

「その通りだよ。私立恵華中学校出身。主にフォワードやってたんだ」

「おおお、すげえ！俺、柴田颯。美颯の“はや”とおんなじ漢字。俺も中学サッカー部でフォワードだったぜ」

嬉しそうに握手を交わす。そして、何うように無邪気な笑みで覗きこまれた。

「なあ。ここにもサッカー部があるんだし、美颯も入るよな？」

「ああ。もちろん、最速レギュラーは俺がいたたくがな！」

「言ったな？負けねーぜ美颯！俺もバカみたいにサッカー頑張ってるし！」

早速部活仲間と仲良くなれた。幸先がいい。

そしてそれは颯も同じようで、気持ちのいい炎がメラメラと瞳の奥で燃えていた。

「いいなあ。お前らもう部活仲間できたのかあ」

「紀仁もすぐに行けるだろ。そういえばどこの部活に入るつもりなんだ？」

「紀仁は合気道だつて。中学の頃は部員3名だから焦ってるんだつてさ」

「サッカーはいいよなあ。いつだって人気だしみんなイケメンだし」

「ははは」

羨ましそうに覗く紀仁に、軽く笑いを返す。

「まーでも、美颯のイケメン度はレベチ。レベチでしょ。前に動画で見たけど実物は

もつとすごいや」

それに反応して颯がしみじみとつぶやく。合わせて紀仁にじつと顔を見られた。

彫りの深い顔は絶妙なバランスでパーツが配置され、毎日のケアを怠らない肌は美しく、サラサラと流れるような茶髪はセンターで分けている。

ダンディさよりも美青年さを追求したその顔は、真つ青な瞳でさらに輝いているはずだ。

「……間違いはないな。こんなイケメンは俺の中学じゃ見たことない。それに美颯がクラスに入った瞬間の女子の反応とかも、わりとはつきりしてたしな」

紀仁の評価に、はははと軽く笑う。

まあ、絶世の美男子などとは言えないが、今まで生きてきた中でこの顔に感謝した機会はとても多い。

中学でも大勢にモテたし、このスタイルと相まってモデルにも勧誘された。自惚れることはしないつもりだが、これも俺のひとつのステータスだという自負がある。

クラスに入ってからあからさまに向けられた好奇の視線も、はつきり理解している。別れて女子のグループへといった帆波は、それとなく追求を受けてるようだ。可哀想に、顔が若干ひきつっている。

「なあ、彼女はいるのかー？」

面白そうに颯は聞いてくる。紀仁も興味津々だ。

「そうだな。美颯に彼女がいるのならそれに越したことはない。——逆に、いないのならしばらく女子たちが荒れそうだ」

「俺たちには彼女ができなくなるな」

「あー。さすがに3年も遠距離は無理だからな。彼女とは別れた。フリーさ」

「グワツ！ いないかー」

「けーっ。羨ましいなイケメンは。選り取りみどりかよ」

衝撃を受けたように仰け反った颯と紀仁は、一瞬のうち直ぐにからからと笑い出す。

良い友達ができたな、と嬉しく思いながら一旦自分の席へと移動する。窓側から2番目、前から2番目だ。教卓へと出やすくその場からもクラスへと発言しやすい。実にちようどいい席を手にしたわけだ。

荷物を机の端にかけ、その後も大半の男女と話をしつつ時間を過ごす、HRのチャイムがなった。

「どんな先生が来るのかな」

チャイムがなり終わる寸前に斜め後ろの席にスライドしたシヨートカットで童顔の女の子——安藤紗代が、実にウキウキした様子で疑問を口にした。振り返れば彼女の隣の生徒も多少興味を持ったようで、顎に手を当てて答えている。

「ああ。この学校の教師なら、イメージとしては気難しく厳しい男性。だが——」
「えー。優しくてあまあまな女の先生がいいな！」

「俺も賛成する。このクラスの雰囲気を見る限り、多少自由を許す教師の方が適しているだろう」

「なんだか難しいこと言うなあ」

緩やかに癖のかかった長髪の男。鷹のように鋭い目をさらに細めている美形の彼は、神崎隆二と言うらしい。特に挨拶を交わしてはいないが、彼が教室に着くなり「隣の席だね！」と紗代に絡まれてるところは見ている。若干あたふたしていたのは実に面白かった。

「確かに和やかな雰囲気だよな。俺は伊王野美颯。よろしくな」

まだ薄い根拠ではあるが、彼はそれなりに観察力に長けているのかもしれない。論理的な思考回路も持つてる可能性も高い。友達ができて浮き足立っているこのクラスの空気から1歩引き、俯瞰するように1人で眺めているのは癖なのだろうか。

なんにしろ、冷静なブレインというのは総じて利用価値が高い。頼もしい友達になるだろう。

そんなことをなんとはなしに頭に浮かべながら、右手を差し出す。隆二も同じように片手を差し出す。がちちりと握りしめた。

「神崎隆二だ。この空気は伊王野、お前と一之瀬。そして柴田や安藤の影響が大きいだろう。こんなにも早く一体感が現れるのは初めて見る」

「美颯でいいぞ。確かにこんなに仲良くなるのが早いのは驚いた」

「お、隆二くんが褒めてくれた…!?それとあたしも紗代でいいよ。さよちとかさーちゃんでもドンと来い！」

嬉しそうに童顔でドヤ顔をする彼女は、帆波に劣らぬコミュ強だ。スタイルよし顔面よし性格よしで、クラスの女子をまとめる存在になりうるだろう。

そして、詳しくは語らないがデカイ。

帆波もそうだ。ダイナマイトだ。揺れる揺れる。

ただし、女子はその手の視線にはかなり敏感であるため、全身を俯瞰する時以外は目に入れることは無い。が、このクラスは相当豊作らしい。一部の男子も、既に興奮したように話題に出していた。それに気づいた女子の視線や態度も、推して知るべしと言ったところではあるが。

「ああ。よろしくな」

神崎はそこにさほど興味は無いのか、俺と紗代の目をしっかりと見据えて答える。女子からの評価は良好だろう。

そんな俺の隣には、これまた無口な少女が座る。背が低く、猫背で俯きがちな彼女の

名前は遠藤絵美。神崎の静かさとは違い、単純に話が苦手な部類の生徒だ。だいぶ前から席に着いていたため、一応挨拶は交わしたが、それ以降誰かが話しかけない限り答えず、自分からは動こうとしない地蔵ぶり。帆波や紗代のお世話になること間違いないだ。

せつかくだし、と声をかけようと体を向き直すと、ちようと教室のドアが開く。バタン！と遠慮なく全開にされたそれは大きな悲鳴を上げ、生徒は思わず前を向いた。

廊下を走ってきたのか、ドアにかかった手の外側でぜいぜいと呼吸が聞こえる。同時に生徒の息を飲む音も聞こえた。

果たしてどんな先生だろうか。堅物頑固教師か、ぼんやりぼやぼや先生か……。まあ、あの姿を見る限り大勢は決したようなものだ。

かくして。

「はあ、はあ……。ごめんね、みんな！ちよつと遅れちゃった」

よたよたと可愛らしい女性が教卓前へと転がりである。ロングの茶髪は緩くウェーブがかかかっており、庇護欲を刺激されるような雰囲気をもっている。生徒は女子を中心にくすくすと笑いが漏れ、男子はお互いに顔を見合わせている。

「はー、よし。Bクラスのみんな、初めまして！このクラスの担任をする、星之宮知

恵です。保健室の先生をしています。気軽に千恵ちゃんとか千恵先生とか呼んでね♪」

星之宮先生はパチリとウインクをかます。途端にいえーい！とうおおお！といった歓声がクラスに響いた。どうやらクラスの大勢にとつて、この先生はあたりのようだ。紗代も「やった！大当たりだよ！」と隆二の背中をバシバシと叩く。痛そうだ。

「うんうん。初日から打ち解けたようで、先生は嬉しいな。さてと、今から1時間後に入学式があるから、それまでにちやっちゃんと大事なことを説明しちゃうね」

自分の名前を書いたホワイトボードにいくつか大きな紙を貼り、さらに数枚の資料を配る。

それから説明されたのは、3年間クラス替えがないことと、入学前の資料で確認した『Sシステム』なるものだ。これは簡単に言えば現金の代わりに学校から支給されたポイントを使うというもの。その収入も支出も、全て学校が確認しているというわけだ。お金の使い方も社会に出る上で大事だと言うことなのだろう。

毎月一日に無償で振り込まれるというのだが、ここで星之宮先生は驚くべき発言を、もったいぶつてする。

「どれくらい振り込まれるかって言うかね？みんな、学生証カードの電源付けてみて」

「お、おおお!!」

「嘘だろ!?!多すぎね!?!」

「なんでも買ひ放題じゃん！」

生徒の悲鳴。喜びの発狂が響き渡る。それもそのはずだ。

10万ポイント。1ポイント1円の価値があるわけだから、その実10万円。それだけの莫大な金額が表示されているのだ。

「うんうん。すごいことよね。この学校はみんなの実力を測る。この学校に入ることが出来たみんなには、それだけの価値があるってこと。——そのプライベートポイントを使えば、この学校のあらゆるものを購入できるのよ」

ポイントは卒業後全額返還させられること。ポイントの譲渡は可能だが、カツアゲは厳禁だということ。ポイントの使用は自由だということ。

『Sシステム』について詳しく説明された後、全員の荷物や教科書は各々の部屋に置いてあるため、今日中に確認しとくといいよ、とアドバイスを放って教室を去っていった。

後に残るのは、若干の困惑と大勢の喜び。

「10万……。なんだか実感が湧かないや。毎月こんなに貰っちゃったら、卒業までにもな金銭感覚でいられるか心配になるなあ」

「そうだな。3年間で360万円。これを全生徒に支給するなど、ありえないように感じるが……」

後ろには、大きすぎるお小遣いに困惑する2人組。困惑こそすれど、星之宮先生の言

葉の隠された意味は読み取れなかったようだ。

それはほかの生徒も同じようで、考え無しに喜ぶ生徒が3割、困惑する生徒が7割に収まっている。

無論、俺も同じように疑問をもった。教育にさほど金をかけないこの国が、たかが高校の一生徒にこれだけのお金を支給できるはずがない。教育に金をかけようがかかけまいが、無駄な支出に間違いない。

そして、それを裏付けるように、先生は『毎月10万支給される』とは言わなかったし、後半など言い方を変えれば『この学校にふさわしくなければ、払うお金もない』ように聞こえた。あの先生が抜けているだけの可能性も無くはないが……。

ともあれ、それを考えたり、真相を突き止めるのはあとのことだ。

せつかく時間がある。残り40分を有意義に使うと、立ち上がった。

「みんな。少しいいか？せつかく時間があるんだ。これから一緒に学校生活を楽しむために、自己紹介の時間にしよう」

クラスの視線が一気に集まる。好意的なものが大半。気持ちいいものだ。

「うん！わたしもそれに賛成だよ！まずはみんなのこと知りたいかな」

どうやら同じ行動を取ろうとしていたらしい帆波は、宙に浮いた腰を椅子に落ち着け、賛成の意を示してくれた。帆波と早速仲良くなった女子一同もうんうんと頷く。

「まずは言い出した俺からさせてもらおう。伊王野美颯。美しい颯で美颯だ。得意なことはサッカーで、趣味は色々——最近は料理とカラオケにハマってる。みんなよろしくな」

決まった。100点満点だ。

男子からは大きな拍手がしたし、女子からもきやあきやあとはしやく声が聞こえる。第一印象は抜群らしい。

その後、クラスの端っこの人に声をかけ、順々に自己紹介をしてもらった。

「一之瀬帆波です。好きなことはスポーツと映画。みんなと仲良くなれたらいいな！3年間よろしくね！」

「柴田颯、だ。美颯と同じでサッカー部に入るつもりなんだ。運動全般なんでもこい！仲良くしようぜ！」

「神崎隆二。ボードゲームが好きだ。…よろしく」

「安藤紗代つて言います！好きなことはバレエボール、部活もちろんバレエ部！最近アニメにハマってます！ぜひ話しかけてください。あたしからもじゃんじゃん話しかけます！よろしくっ！」

どうもこのクラスは元氣印らしい。明るい自己紹介が続き、多種多様な趣味も伺えた。カバディ経験者や、出身国がポーランドなんて人もいた。

その中でも一際目に付いたのが、この4人。

一之瀬帆波、柴田颯、神崎隆二、そして安藤紗代。

おそらく基礎スペックは非常に高く、3人はコミュ力も高い。クラスを率いていく上で、重要な人物になるはずだ。

ニコニコと、時たま歓声をあげつつ、俺は彼らを観察したのだった。

違和感

生まれながらにして、俺は勝ち組に属している。

裕福な生まれ。イオノヨーカドーの社長の一人息子として生まれた俺は、両親の愛情を一身に受け、父親の跡取りとしてふさわしくなるための英才教育を受けた。

世界最高峰の大学を出た二人の息子だ。才能も世界最高峰レベルと言つて過言ではない。

勉強は常にトップ。将来必要でない分野においても、常に人の前に立ち続けた。

運動もそうだ。幼い頃からいつでも5つのスポーツを並行して学び、大した練習をせずとも国内でトップレベルに食い込めるほどのポテンシャルがあることを確認した。中学生で始めたサッカーでも、それまでブロックで2回戦敗退だったようなチームを全国大会出場まで引つ張つたのだ。自らも優秀選手に選ばれ、一躍時の人となった。

見目も言わずもがな。その美貌、スタイル。母親譲りの見た目は、誰もが羨むレベルで完成している。コミュニケーション能力もそれに引きずられるように高く、人間関係で困つたことなどない。

俺は、勝者であり続ける。

☆

「ね、ね。美颯くんてき、どんな曲が好きなの？」

「あ、それ気になる！K—P O Pとか？見た目的に洋楽とか好きだったり？」

4月1日。入学式が終わった日の夕方。

Bクラスはその流れのままクラス会をすることになり、全員でラウンド・ワンへと行くこととなった。

卓球、バブルサッカー、バスケ、テニスなどなど。

色んなスポーツをやってみたり観戦したりで、Bクラスは一気に距離を縮めた。満足に体を動かせた颯や紗代あたりは、楽しそうに大笑いしていた。

それと同様に、男子諸君も嬉しそうだった。

何がとは言わないが、よく揺れたからだ。

こればかりは、言わねばならない。よくやった颯。今日のM V Pは、クラス会にラウンド・ワンを提案したお前だ。

兎にも角にも、みんなでたくさん体を動かしたのだ。

それは俺も同じで、そうなるかどうかそんなスポーツも俺の独壇場。持ち前の身体能力と才能で、見ている女子たちの目をメロメロにさせたわけだ。やったね。

そうして、程よく疲れたあと。

心地いい風に吹かれながら、いくつかのグループに別れてシヨツピングへと移行した。

帆波たちブティックチーム。颯たちカラオケチーム。そして、俺たちマーケットチームだ。

神崎、そして大勢のモブ女子ーズ。周りで俺たちに話しかける女子は津辺仁美や小林芽衣といったカースト上位勢が多い。対して、後方では南方こずえや二宮唯といった女子たちが楽しそうに話を咲かせている。

ちなみに紗代はカラオケに同行し、遠藤絵美や姫野ユキといった一匹狼はラウンド・ワン前に帰宅している。

「そうだな。最近ではK-pop、BOSだったか。あのグループの曲をよく聞いているぞ」「えーおんなじ！あたしもBOSの曲めっちゃ大好きでさ。最近でた曲知ってる？dynamiteってやつ」

「それウチも知ってる！めっちゃSpotifyのおすすめにでてくる」

「つい口ずさみたくなっちゃうもんな。最近は風呂でずっと流しっぱだよ。隆二はどうだ？どんなジャンルを聴くんだ？」

「…俺か」

「あ、気になる！どんなの聞いているの？」

「——あれか、もしかして坂道推しか。いいじゃんか。アイドルはいつの時代もカッ

コ可愛いもんな」

「いや、そういう訳じゃ」

「え、隆二くんアイドルオタクなんだ！結構以外」

「ウチも推しだよ！どの坂推してるの？」

「——」

「拗ねなんて。ごめんよ、隆二。で、どういう曲聴いてんだ？」

「…デスメタルって、知ってるか？」

「もつと意外だ…」

生鮮食品売りの前で、とてもくだらない話を続ける。

まあ、友達付き合いの序盤なんてこんなもんだ。当たり前障りない会話が心地いい。

10人くらいでゆつくりマーケットを回りつつ、各々カゴの中に必要なものを詰め込む。俺は2、3日ほどの献立を思い浮かべつつ、必要になるものを色々と入れていく。

今夜と明日はパンがメインの洋食になるか。ラウンド・ワンに行く前に部屋で確認したが、炊飯器がないという事態が発覚した。全体グループで女子たちが騒いでいたためすぐにわかったが、なかなか致命的なことだと思う。いずれ家電量販店にも行く必要があるだろう。

「あ、ねね見てこれ。無料なんだってさ」

モブ女子の1人。仁美が珍しいものを見たとき声をあげる。指差す先を見れば、出口の近くに『無料』という看板があった。

近づいてみれば様々な食品が置かれ、それとは別れていくつかの雑貨もあった。シャンプーンなどの洗剤や文房具といった日用品が占めている。『1日1人5点まで』と但し書きも添えられていた。

「0円か。腐っている、訳では無いのか」

「みたいだな。確かに新鮮ではないようだけど——」

隆二がじつと観察するのを横目に、俺は商品をいくつか見ていく。

「え、無料の商品なんてあるんだ」

「ふーん。使う人なんているのかな。毎月10万あるのに」

後ろから二宮唯と南方こずえも興味深そうに覗いている。全員がこのコーナーの存在を不思議に感じているようだ。

「たしかにな。お金を使い切った人への救済措置だとしても、毎月10万もあれば必要なんてないだろう」

「んーでもさ。単純にいらなくなったからただにして売ってるだけじゃない？」

「…いや、その可能性は低い。そこまでこの学校に無駄な予算をかけられる余裕はないだろう」

仁美のあつけらんとした物言いに隆二は真剣に答える。

数人がこの存在を疑問に持つ中で、とりあえず買い物終わらせようと声をかけた。

隆二のいうように、無料コーナーがただ単純に生徒の助けになっていくわけがないだろう。なにか意味があるだろうし、一月で10万を使い切ってしまうようなやつに、この措置は甘すぎる。むしろ、残高0円になり次第与えられるペナルティがある、そんなルールがしかれている方が妥当だ。そんな可能性も無くはないが、さすがに説明が入るはずか。

いや、そう考えると『Sポイント』についての説明が簡単にすぎる気がする。

「毎月10万支給」と明言していない以上、次の月には大幅に下がっている可能性もある。むしろ、初月に10万円も配布される方がおかしいのだ。

次の月に支給される金額が変わると仮定するのなら、それは一体何を基準にしているのだろうか。可能性が高いのは個人の成績か。次点でクラスごとの成績か。ランダム

というのもなくはない。いや、それは相当不平等だろう。ありえないか。

判断するにはまだ材料が足りない。それに、ここまで疑問を追及できた生徒がどのくらいいるのか。しばらく考え込んでいる隆二は何となく気づいているようではある。

まあ、最悪教師側に悪印象を与えないようにしろ、と注意喚起をすればいいだろう。

「なあ、美颯」

「……ん？どうした、隆二」

女子ーズと寮の前で別れてすぐ。隆二は俺にその場に留まるように頼み、言葉を切り出した。

ずっと考えるように俯いていた隆二が、その鋭い目をまつすぐ向けてきた。

「疑問がある。俺たちは本当に、来月も10万ポイントを得ることができるのだろうか」
いい兆候だ。隆二からは確信めいたものが伺える。疑問から遡って、星之宮先生の発した言葉の違和感に気づいたらしい。やはり、自己紹介前に感じたことは正しかったようだ。

さて。なににせよ情報が足りない。今打てる手だては限られている。

「そうだな。その疑問は真つ当なものだろう。多すぎる支給ポイント。対して『無料コーナー』の違和感」

『この学校に入ることが出来た君たちには、それだけの価値がある』。星之宮先生はこ

う言っていた」

「ああ。隆二の推測は俺と同じだ。学校に入学したことの褒賞が今回の10万ポイントだとしたら、来月は何で金額が決まるんだろうな」

「そうか…!!すると5月からは別の基準で金額が決まる可能性が高い——」

「候補はいくつか浮かんでいる。それにそのどれもが解決の糸口が見えている。明日には行動に移すつもりだ」

「ちなみに糸口というのを聞いてもいいか?」

「簡単な事だ。上の学年の事情を調べる。他クラスのもつ情報を探る。そして最後の手段が教師に聞く、ってところだな」

それを聞いて隆二は納得したように頷く。

「各々の得意な実力を伸ばす学校だ。こういった推理も生徒たちでさせるわけか」

「ああ。実力は何も学力だけじゃない。身体能力だとかわかりやすいもの以外に、こういった——推理力だとか問題解決能力を試すんだろう」

「わざと真相をかくし、少ないヒントで推理させる、今回の筋はこんなところか」

少ない言葉で、隆二は俺と同じ解釈に至る。実に頭の回転が早く、実に理解力が早い。まさに、この学校はこういった人材が豊富にいるのだろう。

「ともかく、他学年や他クラスへのインタビュ―は任せてくれ」

「ああ。だがいいのか？負担が大きいはずだぞ」

「まあ、俺もその辺は分担するさ。帆波や紗代あたりに頼むつもりだ」

「納得だ。それと、情報が集まったら伝えてくれると嬉しい。俺も微力ながら手伝うつもりだ」

「ああ。そのしよう。頼りにしているぞ」

話は終わり、寮へとはいる。6階の隆二と別れ、俺は8階へ昇った。

全16階あるうちの下半分が男子寮となっているのだが、その一つ一つの階にも、多くの扉があった。そのうちのひとつに、鍵を開けて入る。

電気をつけた。

「さて・・・」

さすが国立の学校。寮ひとつとってもお金のかけ具合が半端ない。

部屋の、主にコンセンツの位置を確認しつつ、荷解きを行っていく。

同時にいくつかの食材を取り出し、料理を始めた。

1時間半ほどして、食事と入浴を終えた俺はふかふかのベッドに腰を下ろしていた。

手元にはスマホ。

画面には通信・連絡アプリのホーム画面が表示され、いくつかの個人名とグループ名が並んでいる。

クラスグルで通知が現在進行形で溜まり、その下には何人かの女子が続く。颯からも連絡がきたようで、早速『サッカー部の坂東先輩にあった！明後日部活やるらしいから一緒に行こう！』と連絡が入っている。

そのうち部活動説明会があるだろう。そのためあまり急ぐつもりはなかったが、せつかくだから颯と行ってみようか。なんとも行動の早いことだ、と少々笑う。

ひとまず、来たメッセージに返事を返し、連絡先を交換した女子にも何人か選んで挨拶を送る。あまり時間はかけたくないが、マメな男というのは安定して評価が高い。

そうして、一人の女子生徒へと別のメッセージを送る。

「少し聞きたいことがあるんだけど、今電話って出られるか？」

ちよつとした挨拶を交わしあつたあとの要求。向こうは問題ないようで、すぐに諾との返事が来た。

小気味よく携帯が震える。

「もしもしー」

『こんにちは、美颯くん。今日は楽しかったね！』

「ああ。このクラスで良かったと本当に思うよ。颯とかめつちやはしやいでたもんな」

『うんうん！というか、美颯君そんなに運動できるなんて思わなかったよ。全部上手かったじゃん』

「そういう帆波も相当だったと思うな。みんな驚いてたのは一緒だよ」

まあ、男子が驚いた理由はそのぼでいーにあるんだけどな！そんなことは一切口にはしないが。

いくつか今日の出来事を笑い合う。お互いにある程度話題を出し合ったあとで、帆波が切り出した。

『そういえば、話があるんだったつけ』

「ああ。プライベートポイントのことだな。疑問に思う部分が多い」

『あ、それわたしも思った！毎月10万ポイントなんて多すぎるもんね』

その後、聞く姿勢に入った彼女に隆二との会話をいくつか伝える。他学年と他クラスの生徒から情報を収集したいと言ったところで、帆波から反応がきた。

『あ、じゃあ上の学年への聞き取りはわたしに任せて。ちやうど聞きたいことがあったんだ』

「そりやありがたいな。俺は明日のうちにほかのクラスを見回ってみるよ」

『うん！毎月入るポイントが変動するなんて一大事だもんね。クラスのことじゃなくても、なにか心配事があつたら頼ってよ。できるだけ手助けするから』

「助かる。遠慮なく頼らせて貰うよ」

『うん！これからよろしくね！』

「ああ、よろしくな。おやすみ」

『うん。おやすみー』

会話を終え、スマホに目を落とす。明日の行動をいくつか考えつつ、10時半までチャットで会話してから、スマホの画面を消した。

目下のところ、また別に気になる点を見つけてしまっている。

改めて、寮での生活のマニユアルを手にとった。

「水道代、電気代、ガス代が無料なのか」

これは、本腰を入れる必要がありそうだ。例えば、無料コーナーのラインナップにも違和感があった。「所持金がなくなっても、最低限の生活はできる」。そんな商品ばかりだった。ここまで保険をかけているのは、所持金がなくなる可能性の高さを示しているような気がしてならない。

支給される金額の変動は間違いないだろう。そして、それが増える可能性より減る可能性の方が高い。その上変動する量は、想像よりも大きなものとなる可能性が高い。

裏付け、証拠。そして新たな情報が必要だ。

無料コーナーに張り込んで、利用する生徒の特徴を調べるもよし。無料コーナーのほかの救済措置を調べるのもありだ。

なんにせよ、行動を起こす手札が足りない。今回のうちは情報量が不足しがちになる

だろうが、今は満足に動く手足を育てる時間だ。

今日相対した生徒の情報を使い出しながら、部屋の電灯を消して目を瞑った。

交流

初めての授業日。

いくら未来のリーダーを育成する高校だろうが、どの授業も最初はガイダンスが行われた。どの教師もフレンドリーで、まるで友人と話しているかのようだった。

幾人か——日本史の茶柱先生なんかは気難しい態度を崩すことはなかったが、その暖かな雰囲気にはBクラスもなごみ始めていた。

ただし、授業中の私語が増えたのは、少々いただけない。いずれ注意する必要があると思う。

「なんだか授業楽しそうだなー」

「うん。英語苦手だけど、あの先生なら何とかかなりそう」

一年生のクラスが連なる廊下を、柴田颯、安藤紗代と共に歩く。昨日のクラス会で一緒にはしゃいだ彼らは、一段と仲良くなつたらしい。こうなると若干気後れをしてしまう。

「ああ。あの物腰なら初回から飛ばすことはないだろ。あの茶柱先生は別だろうけどな」

「あ、わかるかも。あの先生なんか怖い感じするもんな」

「えー？佐枝ちゃん先生可愛くない？」

一時間目が終わったあと、短い休み時間の間ではかのクラスを見に行かないか、と颯に声をかけた。いずれプライベートポイントの仕組みの詳細を調べるために、各クラスにツテを作っておこうと考えたのだ。

短い時間となると、出せる話題も話せる人数も限られる。大人数で行けば人数という面では解決策に見えるが、生徒に威圧感を与えかねない。

迷った結果、コミユ力が高い颯をお供に、サッカー部に入りそうなやつと交友関係を結んでいこう。そういう作戦となった。

そう考えて颯に声をかけたのだが、ちょうど聞いていた紗代も興味を持ったようで、同行を申し出てきたわけだ。紗代もコミユ力はかなり高く、俺自身彼女の能力や思考回路がある程度把握しておきたいと考えていたため快諾した。

まずはAクラス。

イケメンが多いと早速噂になっているそのクラスに、顔を出してみようと思う。

さて、俺の自慢の顔は彼らの鼻をポツキリおつてくれるかな？

「ほんにちはー!!」

紗代の元気な挨拶が、Aクラスで響き渡る。

Bクラスよりも物静かな感じのする教室では、早速教科書を開いて顔を付き合わせている生徒が多かった。

声量や休み時間の過ごし方を鑑みるに、Bクラスに比べて『真面目』なクラスだ。

そんな彼らも突然耳に突進してきた挨拶に驚きつつ、数人の女子や男子がクラス前方のドアへと近づいてきた。

「こんにちはー！Bクラスの人達だよね？昨日楽しそうにしているのみたよ！」

「ほんと!?うちのクラス波長が合う人が多くつてき、颯くんの提案でラウ・ワン行ってきたの。あ、颯くんつてのはこっちの人で——」

早速女子集団と話す紗代を尻目に、近づいてきた男子に目をやる。

「よすー俺、紫田颯。Bクラスなんだ。よろしく！」

颯のこれまた元気な挨拶に楽しそうにAクラスの男子も反応する。陽気な生徒もすっかり混ざっているようで、彼らも自己紹介に乗り気のようにだ。

そんな一瞬の間、俺は気づかれなないように視線をめぐらす。クラスの内情、その前兆をある程度察知しておきたい。

目に付いたのは、教室の奥で椅子に腰をかける、白銀色の髪をした可愛らしい少女。机の脇にステッキがかけられているのを見る限り、足や腰に何らかの問題を持っているのかもしれない。

そんな彼女の気になるところは、目。

隆二のよりも深く、理知的な色に満ちたその瞳はこちらに向けられており——時折強い興味の色が、俺に向けられる。

こいつは、相当頭が回る。

そして、その観察眼や思考スピードも、隆二のとは比べるべくもないのだろう。

とりあえず、ウイंकをひとつ。

予想通り眉をひそめられたが、これでいい。可愛い子には媚びを売れよ、とはよく言われる格言だ。

そしてもう一人。クラス後方からこちらに近づく禿頭の男。身長こそ俺に及ばないが、そこそこがたいがいい彼は真面目筆頭と言った匂いがする。

特に惹き付けられる要素はない。見た目通りなら、杓子定規な考え方をしそうだし、そうであればつまらない人間だと一蹴してしまいうようになる。

しかし、おそらく彼はAクラスのリーダー的存在。

堂々とした態度。目の前で自己紹介している男の一人が、ふと振り返って彼の様子を伺うところ。数人が彼の後ろに引っ付いているところなどを見れば、簡単に見当は付いた。

目下のところ、この青年との関係性がこのクラスで現在最も大切だと判断した。

「俺は伊野野美颯。颯と同じBクラスだ。隣のクラスだし、仲良くしようぜ」
「うん！俺は——」

穏やかに笑顔を浮かべて自己紹介をする彼らを記憶にとどめつつ、後ろの男の介入を待つ。というかAクラス男子がイケメンだと言うのは間違いない。爽やかだがそれなりに彫りの深い顔で微笑みを浮かべる里中という男は、女性の大半に持てるような優しい顔をしている。

まあ、視線を集めるのは今回も俺なんだけどね。

自分の立ち居振る舞いに改めて自信を持ちつつ、正面の男の目を見据える。

その男も気づいたようで、多少距離のあいたところから、割れた顎を引いて言葉をかけてきた。

「葛城康平だ。Bクラスとは隣のクラス。助け合いが必要になる時がいずれ来るだろう。その時を含め、これから有効な関係を築いていこう。よろしく頼む」

だいぶ固い挨拶だった。しかし、その男らしい笑みはたしかに覇氣の感じられるものだった。

後ろの小物がそうしているように、ついて行きたくなるような男だと理解した。

その後、里中など3人ほどの生徒がサッカー部に入ると知ることができ、その時間の他クラス交流は終わりを告げた。

紗代と話していた女子の何人かが、サッカー部のマネージャーになるのかな、なんて話していたのを小耳に挟んでいるため、どのくらいの規模になるのか実に楽しみである。

またひとつ授業が終わる。

今度はCクラスだ。

中々ガタイのいい生徒が多いと聞く彼のクラスは、果たしてどんな特色を持っているのやら。隣のクラスではあるが、あまりCクラスの生徒の目立った噂は耳にしない。

「あ、あの…。」

「うん?。」

そして、Cクラスの締め切られた扉の前に立っていると、オドオドと小柄な少女が声をかけてきた。度の強いメガネをかけ、いかにも根暗女子といった風貌だったが、視線を合わせて優しく質問を返した。

「どうしたんだい?。」

「はうううっ!あ、えと…。その…。」

「うん。ゆっくりでいいからね」

中々話せないようで、埒が明かない。ゆっくりでいいとも言ったが、時間はいつだって有限。精々あと10秒ほどがこの少女にかけられる情けだ。

「う、あ…：あ、あの…：」

「…：！あ、もしかしてCクラスの子？今は入っちゃダメな時間なのかな。会議をやっているとか」

見かねたように、紗代も助け舟を出す。同性の優しい問いかけに少しは安心したようで、少女はガツクガツクとヘドバンした。

「うん…：うん。会議じゃない、けど今は入っちゃダメ…：」

「そうなのか。ありがとう、教えてくれて」

これ以上聞いても情報は落ちそうにないため、もう一度視線を合わせて微笑みながら周りを見る。壊れたように、はわわわなんて言っている彼女の他に、廊下で突っ立つたままの生徒が何人か見える。

「美颯。中で何やってるんだろー」

「なんだろうな。ひとまずこの生徒に聞くしかないだろ」

そう言つてドアから離れた瞬間――。

ドンっ!!

「ぎゃっ!」

「おわっ」

なにかがドアを叩くような重たい音がした。そして、ドアを叩いた気配は、すぐさまドアから離れていく。

「——中で喧嘩でもしてんのか？」

倒れた少女を助けつつ、眉を顰める。耳をすませば何度か殴るような音が聞こえる。悲鳴も罵声も聞こえない。

「止めるべき、でしょ。突入しよう美颯」

今にも颯が飛び出しそうだ。

紗代も不安げな顔をしている。Cクラスの生徒と思しき奴らの表情など言わずもがなだ。

あんまり他人の事情に口を突っ込みたくはないが、未知のままにするには物騒すぎる。幸い、絡まれても対抗できるだけの能力はあるため、今から中に突入しても問題はない。

念の為スマホの音声レコーダーをオンにしつつ、ドアに手をかける。

「やめて置いて方が、賢明だと思います」

ぽやっとした声が後ろからかけられた。振り返れば涼し気な色の髪をした少女が、じつと俺を見つめている。

「クラスのドアが締め切られ、中で危険なことが起こっている可能性が高い。なにか納得出来る理由を聞かせてくれるのか？」

ほかの生徒より理知的で、おっとりとした頬に手を当てる彼女にその場の収拾を放置していいのかと問う。落ち着き具合から、俺たちが怪我をするために声をかけたのではないとわかった。今も尚俺の奥を見透かすように見つめるその目は、不気味な程に浅く見えてしまう。

「まずひとつに、龍園くんが邪魔だてした人をよく思いません。彼は非常に残忍な性格です。無理に関わるのは今後の学校生活を思うと良くないと思います。2つ目はクラス内での出来事だから、です。あまり表沙汰になることを私たちは望んでいません。最後に3つ目は時間です。先程と同じような展開であれば、もうすぐ終わりを迎えます」
「つらつらと言葉を並べる彼女に、どう動くか迷っていると、ちょうど中の乱闘が終わったらしい。

鍵が開けられ、乱暴にドアが開かれる。

「God damn!」

出てきたのは身長190cmを超えるような黒人の大男。185cmで体もかなり鍛えている俺よりさらに一回り大きい。そんな大男が暴言を吐きながら教室を後にする。

「意味がわかんねー。なんだって2日目から喧嘩してんだよ」

「うん。まともに友達を作るのはしばらく無理そうかな」

2人の質問に、同感だと頷く。

「Aクラスが『真面目』だとしたら、Cクラスは『不良』かな」

「同じ学年でもこんなにクラス違うんだね」

「うちのクラスにまで喧嘩しかけて来ないといいいけどなー」

結局、Cクラスとの交流はまた今度ということでの時間を終える。

龍園と言ったか。あのクラスで注意が必要なのはあの男かもしれない。

ドロドロと負の感情が蠢く中で、真つ黒な炎が燃えていた彼の瞳を思い出しつつ、俺はその場を後にした。

☆

休み時間にほかのクラスまで行って友達のを広げる、というのは別に俺たちだけがやっつてることでもない。Cクラスを除いた3クラスから、コミュニケーション能力の高

い奴らが1年の廊下をひたすら泳いでいる。

そのうちの1人がBクラスに来たようで、一部の男子の中で話題になっていた。

授業が終わると同時に、Cクラスに行つてて見ることがなかった訪問客の話題が飛び交う。その内容は実に思春期の男子らしく、顔、そして胸がもつぱらの話題だ。

「櫛田桔梗?」

「ああ!美颯は見なかったのか。めつちや可愛い生徒が来たんだよ。ショートカットで胸もデカイ——ああ。間違いなく学年トップレベルの可愛さだ!」

どこか夢うつつな生徒。弘と言ったか。話を聞くに教室を出る直前に呼び止められ、Bクラスの掛け橋の一員に任命されたらしい。

お触りもされたとかで、夢見心地だ。

「おいバツカヒロ!美颯に言ったら全部持つてかれんじゃねえかよ!」

「あ、やべ。…な、美颯。このクラスにだつて可愛い子はわんさかいんだ。後生だよ。あの子は残してくれ! !!俺らの希望だ!」

慌てたように数人の男子が弘を取り押さえる。なるほど。だいぶ骨抜きにされたらしい。あざとかつたり、ぶりつ子だつたりすると1歩間違えば男女構わず冷たい視線を浴びせられることとなるが、その櫛田とやらは相当やり手らしい。

女子は少し嫌な顔を弘達に向け、櫛田とはしっかり友達判定を通したらしい。特に

負の感情は見受けられなかった。

「Dクラスだっけ？その櫛田ちゃんって子」

颯も興味を持ったよう、弘たちに質問していた。そうなのか。なら丁度いい。

「ああそうだ。——まさかお前から直々に行くんじゃないやねえだろうな!? さつきAクラス行ったとかでAの女子が結構押しかけて来てたんだからな!？」

学年でもトップレベルのコミュニケーション能力と見ていいだろう。その外見も含め、少しは関わりを持っておきたいところだ。

「こんにちは——！」

「こんにちは——！」

「こんにちは——！」

さつきと同じメンツでDクラスに顔を出す。弘たちも着いてくるか少し議論していたが、結局諦めたらしい。

彼らは所謂オタクだ。コミュニケーションを不得手とする彼らには厳しい旅のはず。英断をしたと言っておこう。安心しろ。桔梗、なんて呼べるくらいにはなつてやるからよ！

なんて優越感に浸りながらDクラスを見回す。ほぼ全員がこちらを注目しており、彼

らの手元にはコスメ道具やゲームなどがゴロゴロと転がっていた。

これまたわかりやすくクラスの特徴が出ている。悪いが『不真面目』と勝手に呼称するとうか。

「こんにちは。僕は平田洋介。よろしくね。君たちは？」

そしてクラスの前方で女子たちと会話していた優男が微笑みを浮かべながら近づいてくる。間違いなくこのクラスのリーダー的存在だろう。物腰一つとっても、社会人と言つて過言ではないほどに完成されている。

およその顔面と性格でクラスの女子の心を掴んだのだろう。だが残念だったな。俺がこのクラスに入つてすぐ、心配そうに平田を伺つた彼女達の視線が俺に釘付けになつたぞ！ああ快感。こりや気持ちいいや。

まあそんな意地汚いマウントは捨ておき。

「俺は紫田颯。3人ともBクラスの生徒だぜ」

「あたしは安藤紗代。Dクラスのみんなと友達になりたくて来たの」

「俺は伊野美颯。よろしくな」

「うん。3人ともよろしくね。もちろん大歓迎だよ」

女子の小さな黄色い悲鳴を耳に、クラスを見やる。

おや。懐かしい顔が見えた。

「ふんふんふん」

洒落た鼻歌をかながら、手鏡で眉毛を整える男。

高円寺六助。

相変わらずワイルドに金髪オールバックにした髪型は、そのキリツとしたビジュアルにマツチし、まだ鍛え続けているだろう体は俺と同じくらい豪快だ。

唯我独尊状態は彼の生まれながらのもので、それは何一つとして変わってはいない。この学校で俺のことを測れる定規というのは、今のところ彼だけだろう。過去の関わりという点を除いても、彼のステータスははずば抜けている。

「ふんふんふん」

面識があるどころか相当幼い頃からの馴染みではある。が、互いに相容れない価値観を持つていたり、あるいはわざわざ話しかけるような仲間もないために、高円寺は俺に目を向けず、俺もまた視線を通り過ぎさせる。

まあ、このクラスで煙たがられるようなのは一目瞭然なので、少しの呆れも感じてはいるが。

そんな彼の他には、さして興味を引く存在は居ない。

割と論理的な俺に対し、神がかった勘をもつ高円寺なら面白い生徒も見えているのかもしれないが、このクラスは他に比べて平均値が低いように感じる。

唯一目に映ったのは、窓際奥の2人。

方や自分の他に何もいないかのように本を読み続ける美少女。方や表情を胎内に忘れて去ったかのようなほうけた表情を浮かべるモブ男子。

おそらくどちらにも運動はできるのだろう。姿勢、体格、首。見える要素は少ないが、間違いは無いはずだ。

しかし、それ以外に興味を引く点はない。ほかの生徒も同様だ。オタクの比率が高いようにも感じる。さつきから意気投合し始めた洋介と颯、そして俺たちに僻みの含まれた視線を向けている。

「なあ、美颯!」

「——うん?」

「洋介もサッカー部入るって!ミッドフィルダーだつてさ!」

「驚いたよ。美颯くんは全国大会で優秀選手に選ばれた、あの美颯くんなんだよね?」

「ああ。よろしくな、洋介。3年間サッカー楽しもうぜ!」

「うん。君とサッカーするときを楽しみにしてる!」

軽く握手を交わすと、平田の後ろからきやあきやあ聞こえる。うん。いい気分だ。

紗代の方かというと、話題の榎田桔梗と話しているらしい。随分話が盛り上がっている。紗代はきゃぴきゃぴ系女子とは少し距離を置いているため、ああいった雰囲気の方

が好きなのだろう。

もつぱらのところ、Dクラスのオタクたちは半分こつちを睨み、半分櫛田と紗代、その体に目が釘付けになっている。どちらもBBであるため、仕方ないことではある。

そして、噂通り櫛田は顔面偏差値が非常に高い。自分作りも完璧なようで、所作の一つ一つが可愛く感じるようになっていく。

まあ、要するにあざといのだ。

話しかけに言ってもいいが、脈絡が足りない上に、彼らに後ろから刺されかねない。

ここは洋介たちとの会話を、ありがたく続けさせて頂こう。

「そういえば洋介。聞きたいことがあるんだが——」

「いいとも。何を聞きたいのかな？」

「このクラスも初日に10万ポイントを貰ったのか？」

さて、丁度いい相手がいたため、ここである程度情報収集をしておくか。帆波はそのうち先輩に聞きに行くと言っていたため、そちらの方が頼りになるだろうが、別の視線からも仕入れておいた方がいい。

「うん。みんな一律で10万ポイント貰っていたよ。Bクラスは違うのかい？」

「いいや、同じだよ」

「あー。『Sシステム』だったっけ。太っ腹だよなー」

「うん。卒業するまで金銭感覚がまともでいられるか不安だよ」

「そうだろうな。毎月10万ポイント貰えるなんて考えれば考えるほど恐ろしい」

「え、そう？わたしはもつと欲しいくらいなんだけど」

3人の会話に、1人の女子が混ざってくる。平田のすぐ側、つまり彼女位置に座していた女子だ。見た目に変わらずギャル調の話し方をする。

「彼女は軽井沢恵だよ。——まあ、軽井沢さんのいうこともわからなく無い、かな。服とか買っていると思うしても足りなくなるからね」

「そうそう。なんなら毎月20万でもいいーじゃんって思わない？」

どうにも本気で考えているようだし、平田自身疑問に感じつつもそれ以上の考えには至っていないようだ。

「なにか担任の先生の言葉とかで気になることはなかったか？うちは『Sシステム』の説明とカツアゲみたいな禁止事項を伝えられたんだけど」

「うーん。特にはなかったよ。あ、でも無料コーナーは気になったかな。コンビニで見たんだけど、『1ヶ月3品まで』っていう注意付きで入口に置かれてたんだ」

「あー。それなら俺たちも見たよ。カラオケの帰りに自販機見たんだけどさ、ミネラルウォーターが無料だったんだ」

「相当手当がしっかりしてるんだな」

「うん。これだけ優遇されてると、なんだか悪いことが起きそうで少し怖いんだ」

「平田くんも伊王野くんもそんなこと気にしないでいーのに。どうせ貰えるんだつたらありがたく使っちゃおうよ」

軽井沢の考え方も、時と場合によつては悪いことではない。チャンスを疑つてかかつて逃すことになるのなら、傷を負う覚悟で手を伸ばすのも選択のうち。

しかし、それは余裕がないときの考え方だ。今はまだ考える余裕がある。こういう時こそ、しっかりと手順を踏んで疑問を解消すべきだ。

何も知らずに10万を消費すれば被害が出る可能性も高いし、様々に謎が転がっているのだ。それを解決しない限りには、どうしても先の落とし穴を気にしてしまう。

目の前に舗装された道がある。しかし、目の前が霧に包まれているためにその先も、別の道も見つけられない。そんな状態だ。

それに、今日だけでも多少ヒントは得た。帆波の情報で確実な真相に迫れるはず。「ありがとうな。変な話に付き合わせちゃって」

「ううん。構わないとも。ただ、何か分かったら知らせてくれるかな?」

「ああ。そうしよう」

「ありがとう。そうして貰えるとすごく助かるよ」

イケメンがにこりと笑う。俺もひとまずの急務はこなしたことに笑みをこぼした。

「さて、もうすぐ時間だし、急いで連絡先交換しようぜ！」

「うん。賛成だよ」

「そうだな。——せっかくだし、後ろの君たちも交換しようぜ。名前は伊王野美颯。よろしくな」

「ちやつかり獲物を捕らえるのも、忘れない。」

プライベートポイント

『今日はありがとう!!めっちゃ楽しかった! (スタンプ)』

「俺も楽しかったよ!また行こう。」

髪が含んだ水分を真っ白なタオルで吸い取りつつ、片手でスマホを操作する。チャットの相手は津辺仁美。早速誘いを受け、高校生活2日目ながらデートを敢行したのだ。

行先は『パレット』という名のカフェ。沢山のメニューと甘いスイーツが女子に人気のようで、放課後は多くの生徒が集まっていた。

中にはカップルもいたようで、王道のデートスポットであることは間違いないだろう。Aクラスの男女の姿も見え、驚いたことに高円寺六助も席に着いていた。早速上級生を誑かしたようだ。あくどいヤツめ。

さて、いきなりこんなデートをしてしまえば、その後の対応次第で俺のイメージが一瞬で定着してしまう。

ひとつが、仁美と付き合ったらしい、そんな噂が流れることだ。誰も彼もが遠慮をし、視線が厳しくなる。軽々しく他の子に手を出すことが困難になるのは確かだ。このまま何もしなければ確実にその路線だろう。仁美はなかなか強引な性格をしていた。

ふたつ、色んな子に手を出す軽い男というレッテルだ。このレッテルを貼られてしまえば、一定数の女子に嫌われて距離を置かれてしまうだろう。大半の高校生は避けたいみちだ。

しかし、俺は後者を目指す。

一人の女の子に固執するなど柄じゃない。それに、これだけ豊作なのだ。収穫しないと損だというもの。ある程度手の早い男だと噂が広まれば、それ目当ての子も自ずと近づいて来るものだ。

そして、他の子に手を出すタイミングは、そこまで時間を開けなくていいだろう。

今回のデートは、仁美のスペック調査という点もあった。色々とする上で、刺激的な要素を見つけたかったからだ。デートというタイミングなら、いつもは控えている不健全な視線もある程度向けることができる。

「微妙だな」

そして、すぐ結論が出た。新しく女子を見繕うとしよう。

時刻は22時半。そろそろスマホの電源を切ろうかと考えていると、新たにチャットの通知が来た。

『ごめん、連絡が遅くなっちゃった！今から電話できるかな？』

うさぎが隙間からこちらを伺うようなスタンプとともに、一之瀬帆波から連絡が来た。早速昨日のことを先輩に聞いたらしい。本当にコミュ力が高い。

「諸の旨を伝える。数秒のうちにコール音が鳴った。」

『夜遅くにごめんねー。もしかして寝る前だったかな?』

「いいや、丁度ゲームをした。気にする事はないさ」

その後には二言三言言葉を交わし、すぐに本題へと移る。いつも23時には寝ているのと、女子を遅くまで起こしてはならないという配慮だ。

『そうそう、昨日美颯くんが言ってくれたこと、3年生の先輩に確認してみたよ』

「仕事が早いな。相手は誰だったんだ?今日の部活動説明会の先輩か?」

『うん。あのあとちよつとだけ残って質問したんだ。橘先輩っていう可愛い先輩』

「ああ、司会進行の人か」

今日の昼休み、颯たち男子数人と食堂に行った際、全校生徒に向けたアナウンスがあった。内容は、放課後に部活動説明会があるというもの。

サッカー部に入ると決めていた俺は特に迷うことなく参加し、様々な部活の説明を聞いた。

それぞれの部活に色があり、どこも実績が高く聞いていて楽しかった。

その中でも異色を放ったのは、1番最後に紹介された『生徒会』。圧倒的な覇気を醸し

出す生徒会長、堀北学という男の雰囲気は百数名の生徒全員が呑み込まれた。

なるほど、この学校では生徒会もトップレベルだというわけだ。兼部が認められないとの説明に肩を落しながらも、多少の興味をもって彼の話の耳を傾けていた。

その後、帆波は質問しに行ったらしい。

その内容と、応えを伺う。

『うーん。結論から言うかね、詳しいことは話して貰えなかったんだ』

「——何一つ教えて貰えなかったのか？」

『うん。ただ、『詳しいことは話せないけど、その疑問は正しいよ』——そんなアドバイスも貰ったよ』

「話すことに制限がかかっているのか。ペナルティがある可能性も高いな。ともあれこのまま調査継続するので良さそうだ。助かったよ帆波。ありがとう」

『うん。それと、もうひとつ気になることも教えて貰ったから、明日のお昼一緒にすることってできるかな』

「今言うのじゃダメなのか？」

『うーん。…多分見た方が早いかなんて思う。それと、美颯くんだいぶ眠そうな声してるし』

おや、見抜かれてしまった。そんなにはつきりわかるのか。

しかし、月10万支給はありえない——そう言質を貰ったも同然だ。もうひとつの情報もある程度重要な内容らしいし、今日だけで沢山の情報を得ることができた。

が、頭を回すには少々眠すぎる。おやすみと挨拶を交わして、スマホの電源を落とした。

翌日。一之瀬帆波、そして俺が声をかけた神崎隆二と共に、食堂へと向かう。3日目に今日は授業が本格的に始まり、勉強に自信の無い生徒たちが数人教室に残って互いに教えあっていた。和やかな雰囲気を目に、3人で大きな食堂へと入る。

昨日洋介が話していた『山菜定食』を確認しつつ、400ポイントの醤油ラーメンを頼む。2人もそれぞれ料理を頼み——。

「美颯くん、神崎くん。山菜定食を頼む人の数、彼らの様子。少し観察しようよ」と、帆波が不思議な提案をしてくる。

確かに、山菜定食を頼む人は少なくない。5人に1人は頼んでいる。そのほぼ全員が2、3年生の風貌をしており、同時に財布の中身が非常に寂しいのだとわかる。彼らの見た目から、軽井沢のようにオシャレに振りすぎてるせいでお金がなくなってるわけでは無いことも知れた。髪型も、身につけている品々も、他の定食を食べている先輩たち

に比べても見劣るものばかりだ。

つまり、彼らは根本的にお金が無い。月の支給が変わることを明確に確認できる。

だが、このためだけに時間を使うことは無いはずだ。帆波には、別に伝えたいメッセージがあるかと踏んだ。

「山菜定食を買う人物は、総じて身なりがみすばらしい。彼らの支給が明らかに少ない。だから俺たち1年の支給額も変わりうる、そこまでは理解した。だが一之瀬。ここまではある程度予想がついていた事だぞ」

「うん。神崎くんの言う通りだよ。——ちよつと、気になることを確かめたいんだ」
そう言うやいなや、帆波は何人かの2、3年生にある質問をしていく。

「すみません。クラスを教えて貰ってもいいですか？」

そうか。

その瞬間俺の中であらゆるピースが繋がった。

そして、彼らが鼻の下を伸ばしつつ答えるのを聞いて、確信を得た。隆二も気づいたようで、何か考えるように顎に手をやる。

「うん。予想は当たったみたい」

結局十数人質問をし、そのうちの何人かと連絡を交換した帆波が戻ってくる。待つている間に俺と隆二で受け取っておいた料理を持ち、空いてる席へと移動した。

「昨日、橋先輩が気になることを言つてたの。コンビニによつた時に、一緒に無料コーナ―を確認したんだけど。その時に『あたしたちはあまり使わないんだけど』つて言つてたんだよ」

『あたしたち』、から『クラスごとに支給される額が変わる』可能性に目をつけたんだな』
「その通り！そして結果は今起きた通りだね」

帆波は満足したように。隆二は納得したように表情を変える。

「すなわち、山菜定食を買うような貧しい生徒はC、Dクラス。お金に余裕のある生徒はA、Bクラス。明らかにクラスで違いがあるな」

「そう。その通りだよ美颯くん。クラスごとに金額が変わる上に——」
「おそらくAクラスが最も多く、Dクラスが最も少なくなつていくはずだ」

A、B間、C、D間でも明確な差があつたしな。そう隆二は続けた。

昨日集めた情報から、最初は支給される金額に差がないことが分かる。そしてなんらかの要因があつて、彼らには差ができた。

そう、謎はまだ残つている。

「けれど、何が基準になつて金額が変わるのかな」

「そこそ定期テストの点数、日頃の態度とかじゃないのか？俺の勝手な憶測ではあるが。美颯はどう思う」

「おそらく隆二の憶測は正しいだろう。俺も昨日少し調査した。そこからある程度導き出せる」

そこで、ひとつ情報を提示した。

1年生のA、C、Dクラスのそれぞれの特徴。そして優秀な生徒の割合。

帆波もそれを裏付けるかのよう、友達から聞いた噂を口にする。今日の午前の授業から、Dクラスは3分の1が授業中に良くない態度を取っている、そんな話だ。

「なるほど。確かにAクラスとDクラスでは授業態度でも大きな差があるようだ」

「ああ。金額が変わる要素のひとつが日頃の生活態度。信頼度は劣るが定期テスト、授業中の小テストなども関わってくるだろうな」

そしてプライベートポイントの支給される金額は、クラスごとに違うということ。

3人全員が同じ結論を共有する。

「すると、早いうちにクラス内で注意喚起をする方がいいな」

「うん。今日の終学活が終わってすぐはどうか」

「ああ。それがいい。だが、説明はどうする。一之瀬か美颯が説明した方がクラスメイトの納得は得やすいだろう」

1時間の昼休みを、3人で会議で消費する。結局いい具合にまとまって、その後他愛ない会話をしつつ教室へと帰還した。

「みんな、この後五分ほど時間を貰ってもいいかな」

終学活が終わり、星之宮先生が教室を後にしてすぐ。

帆波が立ち上がり、生徒全員に呼びかけた。

「私と美颯くんで少し説明したいことがあるの」

「ああ。『俺らが毎月もらう金額が減る可能性がある』。これが主な題材だ」

単刀直入に述べる。俺の追加の説明を聞き逃すことはできないようで、全員が席へと着いた。いつもならまっさきに寮へと帰る姫野たち一匹狼も、こればかりは無視できないようだった。

「お小遣いが減るの？それマジ？」

「美颯と帆波ちゃんが言うんなら間違いないでしょ。それにこれからその説明するんだろー？」

「うん。そのつもりだよ」

信じられないといったように仁美たちが声をあげる。少しだけざわついたクラスメイトたちに、落ち着くよう颯が声をかけた。頼もしい限りだ。

「ああ。だが今の段階では迂闊に他クラスには伝えない方がいい。矢吹と時任、ドアを

閉めてもらっていいか？」

念の為鍵まで閉めてもらって、話を始める準備を整える。

こうまでする理由がいまいち分からない様子の生徒たち。そして理解したが若干納得の言っていない様子の帆波には悪いが、これはクラス間交渉の手札にさせて貰おう。

Aクラスは高い可能性で気づくだろうが、いつ発表されるか分からないプライベートポイントの真相を知れるのは、かなり嬉しいことだ。来月のお小遣いの減少は、すなわちクラス内での資産の減少。他クラスに比べて不利に陥る。

しかし、なぜほかのクラスと比較するのか。

それは、クラスごとにお小遣いの金額が変わる制度と、上級生の格差を見ればわかる。初期の10万円。2、3年のC、Dクラスはここからゼロ近くまで減っているのだ。

さすがにシステムを真に知れば授業態度は改善し、お金欲しさにテストも頑張るだろう。

そう考えると、ここまで上と下で差ができるのはおかしい。さすがに金額が上がる制度はあるはず。そう考えると、自クラスの金額を上げ、代わりに他クラスの金額を落とす。そんなイベントがあったとしても不思議ではない。

まあ、憶測に過ぎない話である。

しかし、可能性がある以上、先に手を打っておくのは勝負の基本。

この学校のルール上、交渉の末のプライベートポイントの譲渡は可能だ。おそらく何も知らなければ甚大な被害を被るであろうDクラスなんかに話をフツかければ、少ないプライベートポイントを手にできるはずだ。長期的な契約というのも手のひとつ。

だから、この情報はできるだけ手元で抑える。クラスメイトに出す情報も、最低限だ。「単刀直入に言おう。プライベートポイントの毎月の支給金額はクラスごとに設定され、それは日々の授業態度、定期テストの結果などで上下する可能性が高い」

時間を開ける。飲み込むまでの一瞬だ。

「つまり、授業中の私語、居眠り、遅刻。そういった行動が来月のお小遣いを減らす。——これをしっかり理解して欲しい」

「それ、マジかよ..」

「どのくらい減るのかはわかるの?」

「そこまでは掴めない。どうやら学校側が緘口令を敷いているらしい。何人かの先輩に確認をとって見たが、彼らはプライベートポイントの仕組みについて話そうとはしなかった」

「わたしが聞いたのは、生徒会書記の橘さん。昨日の説明会の司会進行の人って言ったらわかるかな? 橘さんははつきり『詳しくは話せない』って言ったの。つまり、プライベートポイントに何か隠された仕組みがあるっていうのは明らかかなの」

「それが、クラスごとに毎月のポイントが決まって、授業態度で減るってやつか。」
「けどさ、なんでそれがわかったんだ？クラスごとっていうのはどっから来たんだ？」

概要を理解したようで、浜口哲也が疑問を投げかける。

「ああ。その疑問は当然だな。今からその説明をしよう。みんなは食堂の『山菜定食』は知ってるか？」

「あ、あのまずそーなやつでしょ？あれがどうしたの？」

「気づいてる人もいるかもしれないが、2、3年生の何割かがあれを注文している。そして、彼らに尋ねてみたところ、彼らのほぼ全てがC、Dクラスの生徒で、ポイントを払って飯を食ってる生徒はA、Bクラスの生徒だけだった」

ここまで言って、もう一度休息をとる。浜口哲也のような頭の回転が早い生徒はすぐに理解出来ただろうが、そうでない人にとっては今の話は難解すぎる。

実際、俺は浜口のような頭のキレル生徒に向けて話していた。彼らが納得してから、他の生徒だ。

様子を見る限り、賢そうな浜口、紗代あたりはしっかりと理解しているようだ。他の生徒にまで理解させる必要はない。理解させれば、情報が漏れる。

そこで、それまで座っていた隆二が拳手しながら言葉を放つ。

「つまりだ。俺たちが考えるのは、『生活態度を見直し改善すること』そして『定期テス

トに向けて日々の努力を怠らないこと』。このふたつでいい。そういうことだよな?」

「その通りだね。みんなで頑張れば来月も変わらず10万ポイントが貰えるし、いつか増えるかもしれない。だから、一緒に学校生活を頑張ろう、ってことだよ!」

隆二のわかりやすい質問、そして帆波の噛み砕いたまとめに、ようやくクラスメイト全員が理解した顔をする。

「そっか…。うん。全然注意されないから、俺たち授業中スマホいじって真面目に受けてなかったもんな…。」

「俺たちっていうか、主に君たちのせいだと思っただけどー」

「わ、悪かったな!」

「でもさ、まだ3日目だけ。これから頑張れば減らずに済むんじゃないの?」

「うん。颯くんの言う通りだと思う。とりあえず授業中の態度から直していこうよ」

弘に突つかかる仁美に、颯と紗代が優しくまとめる。やはり2人の存在はムードメーカーとしてよく働いている。ありがたい。

「そういうことだ。ただ、先輩方の様子を見るに、あまり話しまわるとペナルティを食らうかもしれない。ほかのクラスには俺たちが伝えておくから、今の話はここで留めておいてくれないか?」

締めめの言葉に、颯たちはまかせろ、と声をあげる。質問はないようだ。生徒を解放し、

俺たちも席に戻る。

「すごいよ、美颯くん。それに帆波ちゃんも！2日目でプライベートポイントの謎を解き明かすなんて」

着くなり紗代が手放しに褒め称える。颯も同じようで、背中を叩きながらお礼を言うてきた。

「だが、正解がわかるのは次のプライベートポイント支給日——あと1ヶ月後だろう。そこで違ったら、俺は相当恥ずかしい思いをするだろうな」

「大丈夫だろー？成績も良くなるし、テストの点も上がるって、いい事づくめじゃんか」「うんうん！っていうか帆波ちゃんもだけど、美颯くんめっちゃ頭いいよね。普通こんなこと思いつかないよ」

ふふ……。もつと褒めてくれ褒めてくれ。ドーパミントツパドツパだ。

そして、2人に挟まれて窮屈そうなもう1人の功労者も見る。巻き込んでやろう。

「はは、ありがとう。だけど俺と帆波だけじゃないさ。隆二が最初に聞いてきたからな。そのあとの会議も隆二ありきだ」

「おい。それは少し話が——」

「やっぱり!?!隆二くん絶対賢いて思ってたんだよ。見た時にかしこセンサーがびびびびつて」

「あははなんだそれ！でもすごいな隆二も。Bクラスの影の功労者。いや、大参謀つてやつだ！」

お、隆二が面白い顔をしている。方向性は違うが眼福と言ったところだな。

その後帆波も混ざって、さらにクラスメイトが入って、みんな楽しんで盛り上がった。

☆

「やつべー。完全に忘れてた」

隣で颯が嘆く。

春先の太陽は真つ赤に燃え、おそらく1時間もすれば地平線に沈むだろう。そんな間に、俺は颯と校舎近くのグラウンドへと急いでいた。

「ああ。おそらくウォーミングアップが終わったらすぐに練習試合だろうな」

あれからひとしきり騒ぎあつたあと。完全に部活を忘れていたことを、ギリギリになつて思い出した。

別の日でもサッカー部は逃げないのだが、何しろ颯は坂東先輩に行く旨を伝えてい

て、洋介にも一緒に行こうと約束していた。

いきなり約束をすっぽかすのは、俺も颯もプライドが許さない。

「あ、もう始まつてるー!」

新入部員も交えた練習試合が始まっている。滑り込みセーフだった。

「すみません。遅れましたー!」

「すみません。遅れました」

ベンチには、おそらくキャプテンかコーチだろうか。背の高いイケメンが試合を観察していた。

まあ俺の方が背高いしいケメンだけだな!なんて自信過剰はさておいて。

その後ろで水筒を用意するマネージャーたちと、その候補生たちを目に入れた。

仁美たちキャピキャピ系女子も揃つてるようで、小さく手を振られた。

しかし、今は相手にする時間はない。目の前の男性に謝罪を認められ、久しぶりのサッカーに勤しみたいのだ。

男が口を開く。

「今は仮入部期間。それに俺は部員でもない。俺からは何も言わないさ」

そして、不敵な笑みを浮かべて振り向いた。その目は、確実に俺を捉えている。

「いいタイミングだ。後半から代われ。——それに、一つ年下の『優秀選手』もいると聞いたよ」

ということとは2年生だろうか。部員ではないということとは、名誉キャプテンみたいな括りなのか——。

「俺が相手をしようか。後半はどっちが点を取れるか、勝負だな。伊野野美颯」
愉悦多分に含まれた視線を俺に固定したまま、その男は宣戦布告をしたのだった。

「同じチームだね。嬉しいよ……早速南雲先輩に目をつけられたんだってね」

ハーフタイム。Bチームでミッドフィールダーを務めていた洋介が声をかけてくる。どうやらDクラスからきたマネ候補もいるようで、背後から強い視線を感じる。

「ああ。どっちが点取れるか勝負だつてよ」

南雲先輩というのは、先程宣戦布告をしてきた、あのイケメンだ。さらさらの金髪に、細身ながら鍛えられた体。身長は俺に及ばないながらも、そのスペックには目を見張るものがあるらしい。

他の先輩によれば、2年生を完全に掌握しているという。生徒会の副会長で、現会長にも匹敵する実力者らしい。実に興味深い。

そして、生徒会ゆえにサッカー部は引退していながらも、ときどき来ては色々とおアト

バイスをしているらしい。サッカーの実力も全国レベルで、部員とは隔絶した差があるという。

「南雲先輩がどれだけ強いのかは分からないけど、頑張つて。全力でカバーするよ。」

「ああ、ありがとな」

ハーフタイムは終了時間を迎えた。

ベンチから黄色い悲鳴をいくつも聞きながら、グラウンドへと歩き出した。

流石、と言ったところか。

向こうのチームにも1年生がいながら、南雲先輩は彼らを非常に上手く使う。彼らがボールを持っているうちに受け取りやすい位置に移動し、機を見てドリブルで切り込んでいく。

後半に入ってから既に0対1と相手にリードされており、その得点も彼のものだ。

「こんなもんじゃないんだろ？」

すれ違いざまに南雲先輩が声をかける。

得点を取られたために仕切り直しだ。

幸い中盤もディフェンスも両チーム同じくらいの実力だ。

あとは南雲先輩と俺の差で決まる。

ペナルティエリアの少し手前で洋介にパスを要求する。上手い具合に足元に送られ、トラップしたまま自身の前方に置く。

そのまま、勢いよく蹴りこんだ。

シュートコースにディフェンダーはいない。ゴールの端に向け、右回転が強くかかったシュートを打ち出す。キーパーの反応も良かった。見事に対応し、片手を伸ばす。

「っ!!」

スパツ!!

心地いい音が鳴る。ボールはキーパーの腕を弾き、そのままネットに突き刺さった。

「「おおおお!!」」

「「きゃああああ!!」」

歓声が響き渡る。相手キーパーが悔しそうにボールを投げ、味方チームが拍手しながら寄ってくる。

「すごいよ!とんでもない威力のシュートだったね」

「やべえやつ入ってきたなあ。南雲以上のシュート力だぞ。高校級どころか超高校級じゃねえか」

洋介、それに先輩たちも手放して喜ぶ。

「ああ。やるじゃないか」

そんな中、南雲先輩が近づいてくる。息一つ切らしてない彼は、面白そうに笑っている。

「この体のおかげですよ。シュートのパワーと正確さには自信があるんで」

「そのようだ。——はは。今年のBクラスはどこよりも早く気づいたと聞くよ。随分と期待させてくれるじゃねえか」

嬉しそうに南雲先輩は笑う。そうして、勝負へと戻って行った。

結局、勝負は4—3と辛勝し、俺は観客の熱烈な褒め言葉の弾幕を受け取るのだった。

ささくれ

4月も初週を過ぎれば、もっぱら友達作りばかりではなくなる。

桜も散り、徐々に気温が上がっていく。女の子の水着を見れる期間も近づいてくるわけだ。

その手の男子にはひどく賛成されるであろうが、俺は裸体より水着や制服姿が好きだ。

見えそうで見えないという、そこはかとなさ、焦れつたさ。そこにエロスの無限を感じるのだ。

裸体の絵画に反応を示さず、スク水に反応してしまうのは、そういった要素が多分に含まれているはずだ。

これも、和製エロのひとつなのだろう。

「俺は一之瀬ちゃんだ。間違いねえ。Gはあるぞ、Gは」

「は？安藤に決まってるんだろ。あれはやべえ。——おい、啓介はどうだ？決まったか？」

「俺は——」

そして、精神的に幼い男子は、三大欲求の一つである、エロの探求を止めることはできない。本能なのだ。

教室の後方でコソコソと話し合う一部の変態達の声を聴きながら、心の中でため息をついた。

ついさつき、Dクラスの男子たちがオッズ表を作っていることを耳にしたばかりだ。そして、それを聞いた女子の反応も見るべくもない。ため息も吐きたくなる。

「……どうかしたの？美颯くん」

「ううん。なんでもないさ。どうだい？その問題。解けそう？」

そんな俺は、彼らと全くおなじ動機で南方こずえと話している。少し前に勉強を教えて欲しいと頼まれ、休み時間や放課後に付き合っているわけだ。

無論仁美やほかの一度デートした相手からこずえへと向けられる視線に少し険はあがるが、彼女の場合割と正当性があった。

こずえは、かなり学力が低い。

バスケット部に所属する彼女は運動が大好き、といったようで、暇さえあれば体を鍛え、ひたすらにシュートを決めている。背はそこまで高くないが、運動神経は抜群だ。

代わりに、彼女は勉強が苦手、いや嫌いである。

もともと、どうして？が先行してしまう性質のようで、どうしても学習に時間がか

かつてしまう。時間がかかれば嫌になり、嫌になれば費やす時間が減る。そうして徐々に徐々に学力が落ちてきたらしい。

授業中もさっぱり、といった様子で教師からの質問に答えられないことも多々ある。そんな中、テストの結果次第で来月の小遣いが決まることを知らされ、彼女は相当焦った。仲間を大事にすることをどうにかして自分の学力を改善しようと目論んだ。

そして、俺に目をつけたというのが経緯だ。

先日の話し合いから頭がいいと感じたこと、そして休み時間も割と忙しそうな帆布と違って、隙あらば女子と喋ってる俺の方が暇に見えたらしい。嬉しいやらなんやらの気持ちはあるが、この子は俺がどんな思いをもつて女子に話しかけてるかを分らないのだろうか。まあ、ちゃんと隠してはいるのだが。

ともあれ、小顔で少しだけぷっくりしている彼女の顔は実に好みだ。ややアヒル口なのもポイントが高いし、パツチリした目元もイイ。——何より、運動する女の子というのは抱き心地が全く違うのだ。華奢な美女ほどもつたいない存在はいない。

以上のことから、俺は快く彼女の依頼を引き受けている。あわよくば、彼女の貫通も引き受けよう。

下ネタはさておき。

「そーういえば、今日の体育はプールだったか…」

「そうだったね。美颯くんは泳ぐの好き？」

ああそう、彼女の声も好きだ。落ち着いたトーンが跳ね上がる瞬間こそ——失礼。例に漏れず、って感じだな。親父の社員旅行で海に行くことが結構あったんだ。俺もよくついて行って素潜りしてた。水の中にいると地上よりも自由な感じがするな」「わかるかも。動くのは難しくなるはずなのに、なんだか体が開放されたような気になるよね」

「ああ。ただスキューバダイビングまで行くと好みじゃないかな。浜辺でキャツキャツするのが一番だ」

「ビーチバレーとかだね。バレーボールってどのポジションが好き？私は絶対にスパイカー」

「ああ、俺は——」

スポーツ好きのこずえは、どんな話をしていようと必ずスポーツの話題に着地させる。ある意味才能だ。が、短い休み時間を無駄にする訳にはいかない。

涙を呑んで手元の教科書を示した。

「マジですごいや…。美颯を見てると肉体美っていう言葉の意味がはつきりわかるな——」

颯の感嘆に頷きをひとつ。ストレッチを続行する。

「颯も良い鍛え方してるじゃんか。無駄のない筋肉って言うんじゃないか？」

「美颯の前じゃ見劣りするだろー?」

待ちに待った水泳の時間。実際は女子が視線に対してさらに敏感になる時間でもあるので、迂闊に見ることはできない。

だが、生まれてこの方様々なスキルを身につけた俺だ。現れた女子を視界の隅に捕らえしだい、脳内カメラが激写するぜ。

そんな煩惱を片手に、男子と会話を続ける。かなり早く着替えたために女子はまだ来ていない。数人体育着姿の女子が端っこに座っていたが、背後の弱腰男子たちの話を聞けば、魅力値の高い女子は参加のようだ。

しばらくすれば女子も着替え終えたようで合流し、少しのウォーミングアップの時間をとって先生に集合をかけられた。

どうやらこれから男女に別れて競争を行うらしい。一等には5000ポイントが与えられるとか。

嫌がる生徒もいたが、どうも『後で絶対に役に立つ』ようで、先生から無理やり参加させられていた。確かに泳げることはいくつかの危機的状況においては必須スキルとなるが、どうも言い方が引つかかる。

まあ、頭の片隅に入れておくだけでいいだろう。

「美颯くん、頑張って〜!」

「美颯くんかつこいいい〜!」

「頑張れ〜!」

1レース目。既に組み合わせは決められているようで、俺は初っ端からスタート位置につくことになった。実力のある生徒が決勝レースにたどり着けるよう、颯や隆二といったスポーツマンは分けられている。

「けーっ!おい、美颯!中学水泳部の誇りだ。ぜってえ負けねえからな!」

「おう、妨害だ妨害!」

「頭が回るからって、運動ができるとは限らねーしよ〜!」

「お前ら!正々堂々だからな!」

僻みの籠った恨み節——もちろん彼らも本気ではないが、その数々に先生は注意する。

時間がきたようで、合図がとられる。一斉に飛び込んだ。

長さ50m。決勝レースも控えているために、普通なら体力を温存するところではあるが、無尽蔵に体力をもつ俺にとってみれば、手を抜く必要すら感じない。

去年の夏ぶりの感覚を思い出しながら、気持ちゆつくりと泳いだ。

50mとは短いもので、すぐにゴールする。

「記録は——23秒42!？」

「すげえ!めっちゃはええじゃんか!」

「美颯くんすごい!」

クラス中の生徒から歓声が届く。水の中よりもこの状況がいちばん気持ちいい。軽く頭を振ってからサイドに上がった。

「しかし素晴らしいな、今年の1年は、23秒台が2人もか——」

おや、俺の他に23秒台がいるようだ。間違いなく高円寺だろう。あいつは水泳が、というか水着姿が好きだった。自分の水着姿が。多少興奮したのだろう。

そうすると、ちよつとだけ競争心が湧くな。

「お前やべーって!こんな記録見たことないよ!」

「その通りだな、伊王野美颯。どうだ、水泳部に入らないか?」

先生の熱烈な勧誘を聞き流しつつ、他のレースを見やる。

第2レースは予想通り神崎隆二が登ってきた。あいつも体を鍛えているのか、しつかりシックスパックで胸筋もくつきりしていた。記録は27秒。さすがと言ったところだ。

他には順当に颯が上がる。26秒65。部活を通してよく知ることになったが、足が

かなり速い。瞬発力はピカイチだろう。

女子は紗代、そしてこずえたちが上がってきていた。帆波は惜しくも敗れたらしい。負けた理由は、後ろの男子たちが卑猥なことを話しているためそつちを聞けばわかるだろう。

どちらも28秒と、男子のトップ層とも遜色ないほどに早かった。

そして、決勝レース。

これに勝てば5000ポイント。あればマシという程度のはしたポイントだが、俺はそれよりも記録の方を気にしている。

「美颯。負けないからな！俺も23秒出してやるぜ！」

「一気に3秒も縮めるのは困難だろう」

「現実的なツツコミやめて隆二!!」

やはり競争というのは心が踊る。正直言えば記録との勝負ではあるが、彼らとの青春の1ページ。乗ってやろうじゃないか。

「2人とも頑張りましたまへ。——俺はさらに先へゆく」

「言っただなー！」

「美颯くん、頑張つてー！」

「颯くんも神崎くんもがんばれー！」

黄色く染った応援を背中に、かくしてレースは始まった。

水泳は、フォームを完成させ、余計な力を抜くだけでスピードは上がる。

しかし、俺が幼い頃からやってきたのは、さらに上のステツプ。

隣で高円寺が泳いでいたのを幻視しながら、無心に泳いだ。

この瞬間が、いちばん気持ちいい。

☆

「あつた。22.65だ。日本の高校生記録まであと0.3秒だったね。めちやくちやすごいじゃん！」

放課後。久々に集中したせいで、若干臉が下がる夕方。水泳の結果に興奮したこずえに連れられ、カフェにやってきた。

外側のテラスから海が見える隠れスポット。そこで興奮したようにこずえはスマホを俺に見せながら、楽しそうに笑みを浮かべていた。

ちなみに俺の結果は22秒92。ギリギリ22秒台に乗ったらしい。これ以上の結

果は、数ヶ月の特訓を必要とするだろう。久しぶりに本気を出してみた訳だが、やはり日本記録の壁は厚い。

こずえも紗代との一騎打ちを制し、見事5000ポイントを受け取っていた。背後の男子いわくFとEの抵抗の差だとか。

「ていうか、プールから上がった美颯くんにみんな見とれてたよ。水も滴るいい男って言うってた。私もそう思うよ」

手元にはカフエラテ。まだなれないもので、少し仰々しい名前のカフエラテ亜種には手を出せそうにない。まだ心の準備のフェーズだ。

「ふふ。長い髪って言うのはこういう時に生きてくるもんだな」

「うん。髪サラサラでいいよね。女の子みたい」

正直、眠過ぎてこずえの言葉が頭に入ってこない。久しぶりに本気で集中したのだ。どうも軽く頭の奥が痺れるような感覚が心地いい。

俺の才能は、無数に存在する。

おそらくできないことはないだろう。

考えられる最適の進学を果たした父は、アメリカの大学で母と出会った。一目惚れだったという。

ドイツ出身の母は100人いれば動画で拡散されて100万人がいいねするような美女だ。当然頭もよく、誰よりもその魅力を利用していた。大学時代は多くの男を虜にし、沢山あくどいこともしていたらしい。

しかし、大学を卒業した母は唐突に生き方を変えた。

大して顔の良くない父に向き合い、そのまま2年の交際を経て結婚したのだ。

日本へと帰り、祖父から受け継いだ会社を抜本的に改革した父はあつという間に業界のトップに躍り出た。

そんな両親の話を、俺はあこがれ半分、不思議な気持ち半分で何度も聞いた。彼らの話は大好きだ。いつだって能力のある両親が成功する。

だから、俺も力を欲した。

幸い、アスリートである母方の祖父の遺伝か、体格に恵まれた。母の美貌も受け継いだ。英才教育と父の才能は俺を天才たらしめた。

何も不足することなどなかった。

好敵手にも恵まれ、愛情を持って育てられたことで、他人の感情の機微も手に取るようにわかるだろう。

小学校の頃には学校どころか地域の中学生を含めても、並ぶもののない王となっていたのだ。

それを、つまらないと感じてしまった。

いつだろうか。当時告白された時、『なんでも出来るから好き』というセリフを聞いたことは強く頭に残っている。

俺一人で勝つことが、ひどくどうでも良くなったのだ。

そこから俺は、勝負への楽しさを追求した。

残酷な勝ち方も探したし、自分を犠牲にする勝ち方も見つけた。小さな一手で効率よく勝つ方法も模索したし、相手が深く傷つくようなやり方も手に入れた。

その中で俺が気に入ったのは、他人を使う勝ち方だ。

自分の手の上で人がコロコロ転がっているのは、何よりも気持ちいい。

当時少しやってみたポ○モンのように、愛情を込めて育てた駒が、自分の想像を超えて動くのが面白いのだ。

それを見つけてからは、勝負事に対する興味が戻ってきた。

中学三年間を通して人を操り、そのスキルの向上に務めた。

恋愛という感情も正しく知ることとなり、それを利用する手も考えた。

とても楽しかった。

思えば、自分で本気を出したことなど、小学生が最後だったかもしれない。

今日もう一度本気を出せたことは、高円寺に感謝もするし、しばらくは快感が頭に残

ると思う。

だが、俺の真価は人を操るところにある。己の手札を増やし、様々な勝ち方で勝負を
楽しむ。

俺は、満たされているのだ。

☆

頭の上に熱を感じる。

押し付けるような少しの窮屈さを頬に感じて、急速に意識が覚醒した。

頭を規則的に撫でられている。あまりされたことの無い行為だ。故に気持ちよく感
じる。

「あ、起きた。おはよう」
体を起こす。

いつの間にか眠ってしまったらしい。吹き付ける風は冷たくなり、太陽は既に沈んで
いる。月明かりが海面に反射していた。

正面にはこずえが変わらず座っている。頭を撫でていたようで、彼女の手が戻って行った。

「——ごめんな。随分寝てしまった」

「いいの、いいの。今日は疲れたでしょ？あれだけ頑張ったもの。おつかれさま」

そう言つてこずえは無邪気に微笑む。机の上を見れば、顔に跡がつかないようにハンカチを引いてくれていたらしい。気が利くというか、なんとも温かい気持ちになった。

「店、しまつちやつてるな」

「大丈夫。私払つておいたから。気にしないでいいよ。今日の5000ポイントだし、実質タダだから」

「そうか……。ありがとな」

「いいの。私もいいもの見れたから」

また、楽しそうに笑った。

昼間不躰にEとか言っていた俺が少しだけ恥ずかしくなる。後で教室後ろの男子たちを殴つておこう。

パサパサした口を残りのカフェラテで潤して、ようやくテラスを後にする。

時刻は20時前。4時間近く眠ってしまったようだ。道にも人影はほとんどない。

「そういえば、明日の午後は暇か？」

「土曜日でしょ？午前部活だから、その後なら全然空いてるよ」

「それなら、俺の部屋に来なよ。授業の予習がてら少し話そうぜ」

「うん！楽しみにしてる」

今日は、いつもとは違った日になった。

勘はそれほど強くないが、いずれ今日という日を強く思い出す。そんな確信が心に浮かんだ。

前触れ

4月も終盤。この時期になると既にクラスの大まかなグループは決まっております、それぞれのクラスでの発言力も定まっている。

津辺仁美や小林芽衣率いるギャル系女子軍団。いつだって声の大きい彼女たちは常に我をとおそうとするため、その発言の圧力は強い。毎度彼女らの声が聞こえる度に震えてしまうような弱い生徒もいるくらいだ。

ちなみに、仁美とはその後も何度かデートをしているが、向こうも俺が興味を持っていないことに気づいたようで、最近はおっぱらAクラスの里中に夢中だ。

2つ目は、一之瀬帆波、安藤紗代率いる元気印女子チーム。男女分け隔てなく仲良く話す彼女たちはまさにこのクラスの象徴といった感じで、帆波と紗代がいることからクラスでの発言力も強い。まあ、彼女らはいつだって協調を一に考えた提案しかしないため、誰も反対する人など出ようが無いのだが。

3つ目は、俺や隆二、颯と愉快な仲間たちのグループだ。男子の中では発言力が最も高く、クラスの中でも強い力を持っている。それに帆波のグループともよく絡むため、俺が発言した時なんかはクラスの実力者5名が味方につくわけだ。これは心強い。

そして、男子オタクグループと、数名の一匹狼。彼らはそこまで語る必要は無い。コミュニケーション能力が不足している生徒が多いため、専門的な分野でしか光らないという扱いにくい駒だ。しかし、その専門分野において右に出るものはなかなかいないという曲者っぷりは重宝できるところではあるが。

今日も今日とて決まった相手とくだらない話をして過ごす。穏やかな日常というのは総じてつまらないものではあるが、俺にとっては非常に心休まる時間だった。

しかし、不穩に前兆は訪れる。

「シャーペンあるいは鉛筆、消しゴム以外のものを仕舞え。今日は小テストを行う。時間は40分。チャイムがなるまでだ」

4時間目の英語の授業。Aクラス担任の真島先生は、いつもより固い口調で小テストの実施を伝えた。

唐突の事態に多少ザワつくが、以前の注意喚起が効いているのか動揺の具合は小さい。問題なくテストは始まった。

そういえば、もうすぐで答え合わせの日が来るのか。

予め契約を立てられたのはDクラスのみ。Aクラスはすぐに真相に気づき、Cクラスは話し合いの場すら設けることは出来なかった。

Aクラスは坂柳と葛城がリーダー争いをしているようで不安定。しかし坂柳がいち

早くこの真実に気づいたようで、呼び掛けを行っていたようだ。対してCクラスは龍園の独裁政治が始まったが、始まったばかり故に不安定らしい。彼の独断で他クラスとの交流も制限されているようだ。

Dクラスも相当荒れていたようで、少ない金額でしか契約を結ぶことは出来なかった。あまりふっかけて関係を拗らせたくはない上、渡した情報をどう使ってもDクラスの残酷な結果は回避し得ないような気がしたのだ。

結局、洋介個人との契約となったが、その契約を別の内容と交換するのが一番いい方の気がする。まあ、それも五月に入ってプライベートポイントの答え合わせをし、足並みを合わせた各クラスがどこに向かうのか様子を見てからだ。

しかし、話は変わるが中々に不思議なテストだ。

目の前の20問の問題を見つめながら、ふと考える。

1問5点のこの問題たちのほとんどは驚くほど簡単だ。普段勉強をしないようなやつでも60点は軽く取れるようになってる。

しかし、最後の3問は難易度が格段に上がっている。どれも高校三年生で解けるレベルだろう。俺ならば難なく解くことはできるが、このクラスで満点を取れるのは一体いるのだろうか。

そして、こんなに問題が偏るテストなど見たことがない。不思議だ。実に不思議だ。

折角20分ほど時間が余ったんだ。ゆっくり考えてみるとしよう。

カツカツと鳴り響くペンの音をBGMに頭を回転させる。

結局、この小テストに何かしらの意味がある、ということ以外憶測の域を飛び出るとはなかった。

☆

伊王野美颯という男を最初に見た時。とんでもないイケメンがいる。まず、そのイケメン度に驚いた。

外国のモデルと言われてもわかる。

高い鼻。彫りの深い顔はシュツと整っていて、白い肌は綺麗で、薄い水色をした瞳も宝石のようだ——。とクラスの女の子たちが話していた。

その辺の細かいことは分からない。けど、とてもイケメンだというのはいやでもわかる。

身長は185cmだという。俺よりも10センチほど高い。ガタイもよく、足も長

い。およそ高校一年生とは思えない雰囲気も醸し出していた。

そんな美颯は、クラスに入るや否や俺の方に寄ってきた。朗らかに笑い、気さくに話す。

気が合う。すぐわかった。

それに入る部活も一緒だという。美颯の名前をこの学校に入る前から知っていたのは、そこにも関係がある。

俺たちが入ろうと思ったのは、サッカー部。俺も中学生の頃はフォワードで、都大会で何点も得点を決めた。全国には及ばないが、都の強いところになら適うはずだ。

だけど、美颯はそんな俺よりも上だ。

美颯は、中学生の全国大会で『優秀選手』に選ばれているのだ。

それに、数年前まで弱小校だった学校を全国に引き連れる。そのおまけ付きですごくいいことだ。誇らしいことだ。

褒められるのが当たり前で、期待に応えるのも当たり前。

一緒に部活に入れることはとてもありがたいことで、一緒に強くなれることに感激もする。俺の心の中の熱は、ぐんぐんと上がっていく。

——それに反抗するかのようには、小さな、黒い火も広がっていく。

羨ましい。悔しい。妬ましい。

顔には出さない。出せないほどには小さな感情。けれど、ものすごく嫌な感じがした。このままこの感情を持ち続けければ、俺は美颯が嫌いになつてしまふ。直感した。

そんな嫌な感情を持つて。けど、どうすればいいか分からず、初部活その日を迎える。ちつぽけな感情はぶつ壊された。

俺がのろい亀に見えるほどのキレのあるドリブル。俺の数千倍正確なシュート。まさに全国レベル。南雲先輩がいたのだ。

その時最初に

そして、それは外見だけでないとすぐにわかった。

入学式から2日後。美颯、そして一之瀬帆波と神崎隆二はプライベートポイントの謎を解き明かし、最もいい対策を俺たちに提示した。美颯は隆二が一番最初に疑問を持つたと言つていたが、あとで隆二に聞いたら、『俺が疑問を形にした段階で八割以上進んでいた。帆波に声をかけたのもその後だ』と返された。

彼ら2人にとつても、美颯の頭の良さや発想力というのは桁違いらしい。

そして、美颯は運動もできる。

一目見て全国レベルだと感じた南雲先輩をゴール数勝負で下しての入部。フィジカルもセンスも圧倒的で、おそらく6月の予選ではスタメンに選ばれるだろう。

何よりも頭に残つたのは、水泳の授業。間違いない。俺や隆二の残つた決勝リーグ

で、50m22秒という圧倒的な記録をたたき出したのだ。

運動において、どの分野でも超高校級だと認めざるを得ない。

話を自分から振ることはあまり多くないが、受け答えや話心地も実にいい。ずっと話し続けたいと思えるし、実際女子はそう感じるのだろう。いつだって美颯の周りには女子がいる。

おそらく、これが完璧超人というやつなんだろう。ウルトラスーパーの形容詞は、美颯にふさわしい。

そんな彼を、俺は尊敬し、頼もしくも追いつきたい背中だと意識している。

まだ始まって1ヶ月だ。

クラスとしての団結力も高まり、おそらく五月に体育祭が来ても学年一のクラスになれると自信を持って断言出来る。

これから何が起きるのかは分からないが、美颯がいれば面白くなるような気がするのだ。

☆

数日前に、俺はこずえを引き連れて夜の街を散策した。

予めルートを設定しておき、監視カメラの位置も把握済み。あまり動き回ることほどきなかつたが、時には布を被つたりしてやり過ごし、だいぶ背徳感溢れる展開となった。

「こないだの、楽しかったよね」

「ああ。次の日は呼び出されないかヒヤヒヤしたよ」

そして、現在俺の部屋のベッドで2人並んで座り、雑談にふけっている。

午後2時から2時間ほどかけて行われた勉強会の休憩がてら、ゆっくり話す時間を設けている。土曜日というのは、実にゆつたりとした曜日だ。

一週間の他愛のない話をしたり、いくつかの過去話をしたり。

付き合う前のこの瞬間が楽しい、そんな気持ち痛みが痛いほどわかる。

「あれもそうだったけど、割と寮監の人って8時過ぎてからも見回らないよね」

「そうだな。さすがに男子が女子寮にいる、とか連絡が入れば駆けつけるんだろうが、そういう深い内容には我関せずなんだろうな」

「あははっ。ありがたいや、けど寮監さんがそれをしていいのかな」

「まあ俺らも学生さ、そういう配慮があるって考えちゃおうぜ。実際俺たちからすれば本当にありがたいな」

段々と暗くなっていく。

電気をつけず、昼の太陽光で灯りを保って勉強していたのだ。そのまま雑談に入り、部屋の中も薄暗くなっている。

まだ隣のこずえの姿は見える。が、しばらくすれば完全に真っ暗になってしまいうだろう。

まあ、そうならないように小さなあかりは確保しているのだけど。

「——あ」

時は満ちた。

とはいえ、焦ることはない。

こずえの手の下に自らの手を差し出し、握らせる。俗に言う恋人繋ぎをしてみまえば、いやがおうにも距離を詰めなければ肩が痛い。

そうして、ピッタリと密着した。

「美颯くんてき、モテるよね」

「そうかもな。割と視線を向けられてるのは気づいてるな」

「あはは。ちゃんと自覚はしてるんだ」

他愛ない、しかしいつもより穏やかな会話が続く。こずえの柔らかい肩が押し付けられる。応えるように手を握る力を強めた。

女子のいい香りが鼻腔をくすぐる。甘い匂いだ。

段々と気分が高まり、こずえは俺の髪に顔を埋める。俺も体勢を変え、こずえを引き寄せてもう片方の手で抱きしめる。

ベッドの上で、俺の上にこずえが座る。一度体を離せば、どちらも陶然とした顔をしているのが丸わかりだろう。

目を合わせる。

視線を誘導して、互いに相手の唇を意識させる。

幸せな時間が訪れた。

☆

高度育成高等学校の敷地には、カラオケの店舗がいくつかある。パーティ用に部屋があれば、1人でこもって歌う用も用意されている。DOMもJoy soundも完備しており、カラオケ好きにはたまらないほどの最新設備となっている。

生徒にとって、その場所は放課後のお供であり、学校生活で外せないものの一つだ。

昨日も今日も明日も賑わい、小さな部屋の中では大音量で歌声が響くのだろう。

「洋介歌声めっちゃ綺麗じゃん！」

「うん。すごく心にくるね」

そして、ちょうど澄み渡るような歌声が終わり、演奏が中止された。歌い終わった本人は恥ずかしそうに頭をかく。

「最近よく行くことになってさ、だいぶ慣れてきちゃったかな」

「いやいや、その高音は才能だよ。聴いてて気持ちいいもん」

「ああ。また洋介の才能が垣間見えた」

「そういう美颯こそ、半端なく上手いよね」

安くて広い。生徒の1番人気のカラオケ店の一室に、男4人が集まっている。平田洋介、柴田颯、里中聡。そして俺こと伊王野美颯。

サッカー部で仲良くなった1年のメンバーで仲良く交流会をしているのだ。

他にもCクラスやAクラスの他の男子、あるいはマネージャーが何人もいたのだが、1番最初は特別仲のいいこの4人で集まることにした。

ミッドフィールダーで常に落ち着いた精密なパスを得意とし、部活内のバランスサーとなりつつある洋介。足が速く、カウンターの際は必ず入用となる、ムードメーカーでフォワードの颯。体格はそこまで目立たないものの、タックルやポジショニングなどの

スキルが高く、判断力も長けているためにチームの司令塔の役割も引き受け始めたディフェンダーの聡。そして、圧倒的な突破力、決定力でゴールを量産するフォワードの俺。あまりポジションが被らないために一緒にチームになることが多く、放課後は一緒に遊んだりする仲となっていた。

今日は、カラオケに来ることとなった。

女子を引き連れてワーキヤーの選択肢もあった。しかし、洋介や俺は常に女子に囲まれていることや、たまには男だけでいいだろうという考えから、女人禁制の談合を開くこととなったのだ。

あからさまに洋介のテンションは高いし、聡も似たようなもので、学校での張り詰めたものは見当たらない。

たまにはこういう息抜きも大事だ。

まあ、颯は上手くバランスをとってためいつもと何ら変わりはないが。

全員で十数曲歌い回し、最後に洋介が *Yesterday* を歌い終わる。実に綺麗な裏声だった。

「はー。歌った歌ったー」

「うん。久しぶりに思いつき歌った気がするよ」

「そうだね。だいたい体力使っちゃった」

颯、洋介、聡が口々に満足を口にする。それは俺も同様で、心地いい感覚に身を委ね、のべーと寝つ転がる。

「そういえばさ、うちのクラスで噂になってたけど、どうやらこの学年にカップルが2組成立したらしいね」

「あー！それ知ってる！美颯がめつちや責められてたやつだ」

「別に詰められてはない。——理由を聞かれたのが半分。どこまで進んだのか聞かれたのが半分だ」

「ははは。やっぱり付き合い始めはこんな反応になるよね」

各々だらけながらテキストに話をふる。どうやら話題は恋愛話に入るらしい。

洋介は困ったような笑みを浮かべ、聡と颯は面白そうに笑っている。

「まあ、詳しいことまでは聞かぬーよ。俺らは俺らでほかの青春を謳歌するからなー！」
「美颯は聞かなくてもだいたいわかるし。せいぜい後ろから刺されないように気をつけなよっ。」

「はは、ありがとう。クラスの女の子たちに色々追及されて割と困ってたんだ」

「ま、そのうちほとぼりも冷めるだろ。そしたら今度は2人の番だな」

「聡はともかく俺はないよ。どうも異性じゃなくて友達だーって見られてるっぽいし」

「その話は僕もクラスで聞いたことがあるよ。——そういえば聡くんは例の女の子と

はどうなのかな？」

「あー。あの子か」

珍しく洋介が意地悪そうに笑いながら聡に追及する。聡は苦虫を噛み潰したように苦笑した。

「顔目当てでつていうのがビシバシ伝わってきちゃってさ。あれからちよつと冷めちゃつたんだよね」

「それは、すまなかつた」

「洋介が謝ることじゃないさ。ていうか美颯。仁美ちゃんが休み時間の度にうちに来るんだよ。手網を握っておいてくれよ」

「ごめんなあ。周りの子はまだしも仁美とは最近折り合いが悪いんだ…。まあ芽衣ちゃんにはそれとなく伝えとく」

「まじ。サンキュね」

カラオケは3時間コースをとっている。明日も学校があるためにあまり遅くまで残ることは出来ないが、時間いっぱいまで話を楽しんだ。

「てゆうかDクラス大丈夫なのか？明日で五月になるけど…。美颯はあのこと伝えたんだよな？」

「うん。ちゃんと情報を取引させて貰ったよ——。けど、もしかしたら5月中はそん

なに貰えないかもしれない。声掛けをしたんだけどあんまり良い感触がなかったんだ……」

「まあDクラスは一部の生徒はどうしようもないって聞くからな……」

「美颯くん、確かに生活態度は悪いけど——」

「悪かった。その生徒を悪くいうつもりは無い」

「洋介に協力してくれたのは櫛田ちゃんだったっけ？」

「うん。彼女は本当に頼りになるよ。僕にできないことを彼女はできる」

「イケメンは恨まれるからな」

「けーっ。それを美颯が言うのかよ」

「まあ学校で一番のイケメンだから。何も言い返せないさ」

「それが事実なんだよなあ。神様は仕事をしてくれないのか……」

落ち込んだ素振りを見せた颯は、思い出したように顔をあげて、真剣な顔で洋介を見る。

「そーいや聞いたぜ。Dクラスの堀北さん。だいぶ悪口言われてるみたいだけど。大丈夫なのか？」

「うーん。彼女はあまり他人と馴れ合いたくないようなんだ。どうしても言い方がきつくなつちやつてるから、どうにかして他の子達との不和を解消したいなと思うんだけ

ど」

「プライドが高い故に自分を曲げることが出来ない。そう聞いた。実際頭はいいんだろ？」

「うん。彼女は頭脳だけじゃなく身体能力でも非凡な能力を有してる。それだけに惜しいよ」

「大変だな、Dクラスは」

俺の慰めに、少し疲れたように洋介が頷く。明日の発表も憂鬱なのだろう。せめて少しでも多くお小遣いを手に入れて、ぜひ自分を甘やかして欲しいものだ。

ま、プライベートポイントを吸収する契約を立てた俺が言うのもただけだね。

そのあとも色んな話を続け、最後に一通り歌って4月は幕を閉じた。

走り出し

5月最初の始業チャイムが鳴った。

友達と駄弁っていた生徒たちはすぐさま着席し、朝学活に遅れがちな担任を待つ。

いつも通り、遅れているらしい。

「ねね、美颯くん。今日振り込まれた金額見たよね？」

「ああ。86000円だったな。思ったより下がったようだ」

今日は、俺にとつてもクラスにとつても重要な日となっている。4月3日の説明。その答え合わせであり、その他大勢の生徒にとつても、これからの学校生活を左右する大事なことだ。

まず一つ目。

学校から支給されるプライベートポイントが少しだけ下がっている。これは俺の推測どおりのこととなった。

あとは、その金額が決まる基準。これを知った後は学年全体が揺れることになるだろう。

「にしても星之宮先生遅いなあ」

「ねー。前みたいに夜呑んできたのかな？それならしょうがないけど」
「…生徒に二日酔いを容認されるなどあるはずのないことなんだが」

紗代の救いようのない解釈に、隆二は呆れたように目頭をつまむ。

隆二もかなりこの結果が気になっているのだ。おそらく俺たちが予想した基準で生活していくことで起きることなどを、ある程度想定していたらしい。

既に『まずはCクラスの動向に注視するべきだろう』との言葉を貰っている。俺もそのクラスは気になっていたため、実にありがたい駒だ。彼が頭を働かせればリソースを別にさける。

クラス内が段々と騒がしくなってくる。既に5分もたっているのだ。次の授業は10分後に始まる。早くしてほしい。

クラスを見渡せば、ある程度余裕をもったらしい生徒たちが、スマホ片手に放課後の約束や雑談をしている。その中で、帆波、颯と目が合った。

2人とも少しだけ緊張しているようで表情が固い。

さすがにうるさくなってきた教室を沈めようと立ち上がりかける。

教室のドアが開いた。

「みんなー、おはよおえ。ぐっ、学活を始める前に、君たちに見てもらいたいものがあるの…」

今にも死にそうなカエルのようなしやがれ声。

あーあ。紗代の予想は残念ながら当たっていた。教師にとって割と重要な日のはずなのに、なんで呑んできた。

おえおえとええきながらホワイトボードに1枚の紙を貼る。

上からAクラス 940ポイント、Bクラス 860ポイント、Cクラス 520ポイント、Dクラス0ポイントと書いてある。

「うー、昨日なんで先生がこんなに飲んだかって言うかね？すつごく嬉しかったからおえ」

教卓に突っ伏した。

「——簡単に言うね。あとは美颯つちと帆波ちゃんに聞いて。これはクラスの成績の指標、クラスポイントよ。そして、この数字が高いクラスがAに、低いクラスがDに下がるわ」

手元のカンペを目にしながら、おそらく相当痛むだろう頭で続ける。

「うえー。あと重要なことがひとつ。この学校の特徴『進学率・就職率100%』っていうのは卒業時のAクラスだけの特権よ。それ以外のクラスは保障されないの」

真つ青な顔でだるそうに話す、その内容は一切聞き逃すことができないものだ。この人が話しそびれた可能性も考慮して他クラスの先生に聞くことも考える。

「クラスポイントの引かれた詳細はここに置いておくわ。あと小テストの順位表。あとで見といて。赤点のことも書いてあるわ。全員素晴らしい成績よ」

最悪だ。この先生ついに持つてる紙を机に置くだけ置いて帰ろうとしている。なんという横暴。

「最後に——中間テスト3週間前だけど、入学早々にプライベートポイントの謎を暴いたあなたたちなら、必ずAクラスを打倒できる。先生はあなたたちがいつかAクラスに上されるだけの力を持つてるのが嬉しくて——うっ」

「知恵ちゃんせんせー!?!」

ピシヤリ。

最後のセリフで吐き気を催した星之宮先生は、口を押えて教室から飛び出していった。

啞然としつつ、帆波とともに教卓にぐしゃつと置かれた紙を整理してホワイトボードに貼る。どうやら二日酔いで話せなくなるのを見越してか、紙にまとめていたらしい。

——いや、明らかに星之宮先生の字では無い。この几帳面な字を見る限り、見かねたほかの教師がフラインプレーをしたのだろう。同僚に恵まれてるな。

ホワイトボードに貼られた紙は合計合計4枚。

クラスポイントの得点表、小テストの順位表、細々した注意書き、中間テストの範囲表だ。

見たところクラスポイントの100倍の数値がプライベートポイントとして毎月支給されるようだ。

そして付け足されている『遅刻3回、授業中の私語・居眠り22回』。おそらくこれが減らされた140点の内訳なのだろう。遅刻1回で10点減少。授業中の私語・居眠りで5点減少と言ったところか。

しかし、クラスポイントがあがる事柄は書かれていない。下がり続けるから上級生はあれだけ極貧の生活をしているのだろうか。

しかし、そうすると現在0ポイントのDクラスは絶対にAクラスに上がれないことになる。そんな初見殺しはありえないはず。何かしら挽回の手口はあるはずだ。

探していると、細々とした注意が書かれている紙に一部書いてあった。

『中間テストのクラス平均点の順位によつて、各クラスクラスポイントを得ることができきる』

これだ。やはり何かしらイベントがある度にポイントが増える仕組みなのだろう。

他にも何が書かれているのかをサラッと確認しておく。

ちなみに小テストの1位は俺だ。しつかり満点を取れている。2位に隆二の90点。さすがだ。

クラスの最低点は二宮唯の55点で、クラス平均は80手前と言ったところか。なかなか注意喚起の成果が出ている気がする。

「ね、帆波ちゃん。その紙にはなんて書いてあるの?」

1人の女子生徒の質問に、ちらりと俺を見てから応える。

「そうだね、とりあえず2時間目までにこっちの紙は人数分印刷しておくよ。今はあまり時間がないから——」

「放課後にクラス会議だな。この内容の他に中間テストについても話すことが沢山ありそうだ」

「と、いうことで今日の放課後、みんな少しだけ残ってくれないかな? 30分までに抑えるつもりだよ」

帆波の声掛けに、生徒は特に異論はないようで、全員が頷いて同意の意を示した。

残り3分で次の授業が始まる。全く、はた迷惑な担任を持つてしまったものだ。教室移動じゃなくて良かったな。

しかしながら、Dクラスの0ポイントは正直驚いた。洋介の絶望した顔が目には浮かぶようだ。

彼の、そして櫛田のこれからの身を削った奔走に合掌をひとつ送っておいた。

☆

「お前たちは本当に愚かな生徒たちだな」

茶柱先生の呆れた、不気味な言葉がクラスに響く。

5月1日。その朝学活の時間。

生徒たちはいつになっても振り込まれないプライベートポイントに疑問をもち、同時に恐れていた。

平田が以前話していたことが真実だったのでは無いか。

振り込まれていないのではなく、0ポイントが振り込まれたのではないのか——。その疑問はすぐに解消する。

本堂が茶柱先生に疑問を投げると、彼女はこの罵倒から始め、真実を語っていった。

日々の授業態度などで決まるクラスポイント。それを1000倍した数字がプライベートポイントとして毎月の頭に入る。

もともと1000ポイントあったそれを、俺たちDクラスは1ヶ月で少しも残らず削りきったこと。

そして、クラスポイントの多さでAから順にクラスが決まり、一番下のDクラスは落ちこぼれのクラスだということ。Aクラス以外の生徒には、進学も就職も保障しないこと。

ほぼ全ての生徒が、その言葉に納得し、そして悔しそうに歯を食いしばっている。それはなぜか。——10日ほど前の、平田の言葉を振り返ればわかる。

クラスで確固たる発言権を確保した平田、そして櫛田は4月ある日の終学活で生徒に呼びかけた。

「すまない。みんな、この後少しだけ残ってくれないかな？大事な話があるんだ」

その柔らかな物腰、高いルックスで女子には人気だ。加えて男子の多くは草舟のごとくだだ流されるだけだったために、クラスのほとんどの生徒は残ることを認めた。

「は？知らねーよ。俺は部活があんだ。テメーらで勝手にやってろ」

しかし、一部の生徒、日頃から素行の悪い須藤や、1人一匹狼を貫く堀北などは聞く耳すら持たずに帰ろうとする。

「ごめんね、須藤くん。でもね、来月のプライベートポイントが減っちゃうかもしれない

大切な話なの。5分だけでいいから残ってくれないかな？」

と、そこで櫛田から放課後話す内容、爆弾が投下された。その言葉は須藤よりも他の生徒たちを大きく動揺させ、一瞬でクラスが騒がしくなる。

「え、どういうことだよ櫛田ちゃん。毎月10万ポイント支給されるんだろ？」

「そうだよ。じゃなきゃ学校は嘘ついたってことになるぜ」

「ねー平田くん、どういうことなの？本当なの？」

収集がつかなくなってしまう。平田と櫛田は慌てて彼らを宥める。まだ話し合いを初めてすらいらないのだ。それなのにこうまで揺れてしまうのは彼らとしても不本意だろう。

しかし須藤、それに堀北は考え直したよう席に着く。

「ありがとう。それじゃ、今から話すんだけど——高円寺くん？」

再び問題が起こる。座った2人の代わりに高円寺が立ち上がりそのまま去っていく。うとしたのだ。入学から変わらないその唯我独尊ぶりに、平田含め多くの生徒が困惑し、呆れる。

「ふふ。何を話し合うか理解したし、それが私に関係の無いことだともわかった。故に、私が無為に時間を浪費することもないだろう？」

「あー、えつと高円寺くん？」

「高円寺お前俺たちのプライベートポイントの話だぞ？こういう時くらい空気読めよ」
「てゆーかお前のせいでプライベートポイント減る可能性だつてあるんじゃないのか？
何を理解したのか知らないが話は聞いてけよ」

高円寺の口調にイラツとした男子たちが口撃する。

しかし、露ほども届いていないようで、むしろ面白そうに生徒たちを見下ろす。

「実にくだらない。無垢でいることは確かに美德になりうる。しかし君たちのは無知。
実に醜い」

呆れてものもいえない。そういうように首を振る。

「それに、ポイントを減らしているのは君たちのような生徒さ、山内ボーイ。せいぜい無
い頭を必死に回したまえ」

「てめえ高円寺！」

笑いながら教室を去っていく。

憤りの収まらない男子だが、平田はこれ以上時間を無駄にできないと話を始めた。

内容は『生活態度を改めない』と、毎月支給されるプライベートポイントが下がる。と
いう話だった。信頼出来る筋からの話らしい。

「今のままでは確実に来月のポイントは下がる。少しずついいから授業中の態度を改
善していけないかな？」

優しく、誰もが納得できるように譲歩する形で平田は話を続けた。

おそらく今出された情報の他にも伏せられたものがあるだろうし、賢い平田が納得するだけの理由があるのだろう。

しかし、それを話してしまえば混乱する。平田は情報を制限し、彼ら生徒が納得するよう榎田に懐柔させる。その方法をとったようだ。

——しかし、それは悪手としか言えない。

いや、このクラスには既に取れる手などなかったのかもしれない。

「あ？俺が悪いって言いてえのかよ。まだ平田の言うことが事実かわからねえじゃねえかよ」

「でも授業態度が悪いのは事実でしょ？ていうかそれが原因であたしたちにまで影響が出るのは嫌なんですけど」

「うっせーよ糞アマ」

「は？ていうか平田くんが言うことなんだから素直に信じなさいよ。あんた頭悪いんだし」

「そうよ、それに男子たちも。ずーっと授業中喋っててうるさいっいたらないわ」

「は？お前らだつて喋ってたじゃねーかよ」

「あんたたちの方がよっぽど迷惑って言ってるの」

向けられた責めるような視線に須藤がキレる。確かに須藤は一番問題行動がおおい。それは事実だ。

しかし、それをはつきりさせてしまえばクラスのヘイトは彼に集中し、須藤は衝動的に反抗してしまう。

そして、一度人を攻めた女子たちはヒートアップし止まらない。次は池や山内たちを槍玉にあげ、既に話し合いの形をなさなくなってしまった。

榎田も平田も事態の収集に務めるが回復するはずがない。このクラスでは男女間で溝の深い。ちよつとしたきっかけがだったのだ。

そして、ダメ押しに事態が動く。

「——はあ。くだらないわ。本当にくだらない。わかりきっていたことだけど、このクラスでまともに話し合いができるはずがなかったのよ」

「は？ あんた何言ってるのよ。勝手に上から目線で物言わないでくんない？」

「あなたたちに言われる筋合いのない話ね。それにクラスに迷惑をかけているのは、一体どちらなのかしら？」

そこで堀北は一言区切り、平田を睨めつけた。

「それにこうまで至った理由が聞けてないわ。信頼出来る筋というのもせいぜいあなたの主観。まあ、聞いたところでこの様子じゃ何も改善しないでしょうけど」

「は？平田くんはクラスを思つて言つてるんじゃない。信用だとか——」

「本当にくだらないわ。… さっきの高円寺くんの言葉を使うようだけど、無い頭を少しでも回しなさい。私は抜けさせて貰うわ」

そう言い捨てて、堀北は帰路に着く。

ピシヤリと閉められた扉は拒絶の意味を示し、誰も追いかけるほどの気力をもてなかつた。

「勝手にやつてろ」

そう言い捨てて須藤もその場を去る。

そして、クラスに残つた生徒たちは口々に彼らの悪口を言い始めた。どんどんヒートアップし、ついには頑張つていた平田も崩れるように席につく。

話し合いは完全に形をなさなくなつた。生徒は流れるように教室から離れていく。

ついに、教室には俺と平田だけが残つた。

——— 実に気まずい。

これが榎田とかも残つてくれたなら、多少話はできた。しかし、彼女はクラスメイトのケアのために既に去つてしまつていた。

このまま去つてもいいが、平和な日常を願う俺としてみれば見過ごせない案件だ。崩壊したクラスで普段通り生活できるほど、俺は能天気じゃ無い。どうにかして平田を立

ち直らせたのだが、それも自己紹介なんかよりはるかにハードルが高いな。

「平田。大丈夫か？」

とりあえず無難。無難に行こう。

「——ああ。綾小路くんか」

「まだ始まって一ヶ月だろ？そんなに気負うものじゃないさ。それにみんなも来月の始めに身に染みて理解するだろう」

「うん。うん、その通りだ。その通りなんだよ」

酷く憔悴している。

平田には食堂に誘いかけてもらった恩がある。多少膿を吐き出してあげられればいいが。

「僕には上手くできない。櫛田さんのようにみんなを落ち着けることなんかできないし、美颯くんのように上手くみんなを納得させることはできない」

聞いたことのある名前が出てきた。おそらく美颯というのが信頼出来る情報源だったというわけか。

「だが、その美颯から情報を得たのは平田がいたからだろ？」

「だけど、それを活かせなかった」

「ああ。だが、彼らは理解したはずだ。須藤だって他の生徒だって、授業中に私語をした

リスマホをいじる時、どうしてもプライベートポイントのことが頭をよぎるはずだ。次の授業からは確実に問題行動は減るさ」

「そう、なのかな…。」

「ああ、だから——上手くは言えないが、平田は頑張ってる。俺も応援するよ」

ようやく顔をあげた平田の目は、なんとか生き返ったような色をしていた。その表情にとりあえずの処置が終わったことを確認し、安堵する。これで明日からも静かな日常が遅れるはずだ。少なくとも授業中はもう少し静かになるだろう。

「ありがとう、綾小路くん。君のような友達がいてくれて、僕は本当に嬉しいよ」
え。

「俺は、平田の友達なのか？友達でいいのかな？」

「不思議なことを言うね。少なくとも僕は綾小路くんと友達でいたいと思ってる。それは嫌かい？」

「いや、俺もそうありたい。ありがとう、平田」

「ううん。礼をいうのは僕の方だよ」

しまった。初めての事だったから思わず変なことを聞いてしまった。人とのコミュニケーションは本当に難しい。デカルトやカントにはそっち方面でも研究を進めて欲しかった。

その後、部活に向かった平田を見送り、俺も帰路に着く。

4月2日目の学校を思い出した。

伊王野美颯という生徒を見たのはあの日が最初だ。

最初目にした時は、この世に神がいないことを確信した。

平田以上にイケメンで、平田以上に女子に絡む。Dクラス男子の視線をもらにくらっても動じない強靱なメンタルには脱帽ものだ。

向こうはこのクラスを観察しに来たようで、俺もバレない程度に彼を観察した。

185cmはありそうな身長は須藤や高円寺と比べても一回り大きく、体の部位どれひとつとっても高校1年とは思えないほどに完成された肉体だった。

ようは、高円寺級が学年にもう1人いたのだ。

当時の俺は——いや、今もだが、伊王野のコミュニケーション能力と顔面を羨ましく思うので精一杯だった。まるで外国人のような精悍な顔つきに、虫のように女子たちが集まっていくのだ。…そうすると虫すら寄り付かない俺はなんだっていう話になる。いや、あまりいい例えではないな。

ともあれ、伊王野美颯という存在を認知したのはあれが最初だ。

それ以降も度々話が出てきた。

曰く、女の子を取つかえ引つ変え部屋に呼んで楽しんでる。一度に彼女を3人持つクズだ。俺はあいつが櫛田ちゃんを舐めるようにガン見しているのを見た。

全て三バカの言葉だ。

おそらくそれは噂でしかなく、僻みによる妄言の類なんだろう。… 本心に3人も彼女がいるのであれば、今度こそ俺は神を恨む。

しかし、その他から聞こえてくる内容は本当に聞こえのいいものばかりだ。

曰く、中学生の頃にサッカー全国大会で優秀選手に選ばれた。曰く、Bクラスで一番頭がいい。曰く、女好きだがとても紳士だ。

ここまで完璧な人間がいることに驚いてすらいる。羨ましい。

あまり喋りすぎるといふ訳でもなく喋ればどこか不思議な感覚で、ずっと話していたくなる。そんな話もクラスの女子から聞いた。お茶目な部分も、Sつ気な部分もあるらしい。まあ仕入れた情報としてはもつとも俺から遠い位置の情報だ。

——しかし、俺は彼に裏の顔があるような気がしてならない。

どうにもこの流れを見る限り、早い段階から伊王野の影響力が高まりすぎている気がするのだ。

それに、今日の話からもある程度彼の思考回路を辿ることができる。

まあ、目下のところ、俺が気にしているのは一つだけ。

学年の女子全員が伊王野のもとに集結し、俺の青春が1ミリたりとも無くなることだ。

これ以上の悲劇はないし、ありえなくもない。

いや、堀北は絶対に近づかない気がするな。あいつは自分から孤高を貫きそうだし、自分のを貫かれる真似はしないはず——こういう下ネタは厳禁だった。

しかし、俺の周りに残る女子が堀北だけというのは非常に宜しくない。そんなことをされれば別の方向に目覚める可能性すらある。俺が新たな分野を開削するのが先か、堀北がデレるのが先か——。

喫緊の問題を一生懸命考えていると、メールが来る。

そうだ、櫛田はどうだ。彼女が残ってくればそれだけで天にも登る気持ちだ。どうにかして伊王野の傍に行かないように何とかしよう。方法などひとつも浮かばないのだが。

そして、期待して相手の名前を見ると『堀北鈴音』。そういえば櫛田とは話したただけだった。このエンドしか存在しないのだろうか。俺は絶望した。

冗談はさておき、メールの内容だ。

どうやら今日の平田の発言が気になってしょうがないらしく、明日から調べたいのだそう。

平田に直接聞けばいいのに。ツンデレめ。そう返せば死ぬことはわかっているためにそんなことはしない。

気になるのは最後の文。

『だから、あなたにも協力させてあげるわ。』

打ち間違いだろうか。

言うに事欠いて『させてあげるわ』。何をどう考えたら俺が堀北の調査に興味があると思うのだろうか。

メールで反論しても返事はない。

確定事項のようだ。

俺は諦めて、流れに身を任せることにした。最近読んだ小説になぞろう。俺は草舟だ。

☆

5月最初の学校が終わり、放課後の時間がやってくる。金曜日の今日は部活があるた

めに、いつもなら数分ほど友達と喋った後にグラウンドに直行するが、今日はそうもいかない。

先輩に遅れることを断っておくと、すんなり許諾された。どのクラスもこの日に会議をするのは当たり前らしい。

「さて。まず最初に確認してない人はその紙を読んでくれ。その内容を理解してもらった後に、今日の星之宮先生の言葉の中で重要なことを話そう」

思えば酔っ払ってながらも、怪しい発言はいくつも落として言ってくれた。頭が痛くてまともに考えてなかった可能性もあるが、今回クラスポイントの減少を抑えられたのは初日の彼女の言葉のおかげだ。

おそらく今回も彼女の言葉をヒントに探っていくことになるのだろう。

「質問はこれだけかな？それじゃ、美颯くん、お願いします」

「お願いされました。さて、プライベートポイントの謎がスッキリしたところで申し訳ないが、早速厄介な状況になった。難しいことは精一杯楽しんだ方がいいけど、まずは状況を整理する必要がある」

生徒の顔を見る。真剣な表情だ。彼らの信頼を今日で完全に勝ち取ることができたし、彼ら自身これから起きていくことに正面から向き合っているようだ。

「俺たちはBクラスとして、ほかのクラスと戦わなければならない。戦うと言っても方

法は穏やかなものだ。他よりも模範的に生活し、定期テストの点をあげる必要がある。まずは直近の中間テストの話をしようか」

そうして、帆波に話をふる。以前と同じように3人で話し合いを予めやっておいたのだ。中間テストは主に帆波がまとめることになっている。

「うん。それじゃあ話させてもらうね。私たちに必要なことは簡単。学力をあげてテストの対策をすること」

俺は一枚の紙をホワイトボードに貼った。

「そのために、私は勉強会が必要になると思うの。学力の高い人が数人ずつのグループに別れてみんなの勉強を手伝う。大きな底上げで平均点向上を狙おう！っていう感じかな。何か質問とか意見とかない？」

帆波が確認するように生徒にふる。みんなそれぞれが賛成の意を示すように口々に言葉を発する。

唯一疑問がありそうだった浜口哲也は、俺が貼った紙を見て納得したらしい。帆波はそのまま話を続ける。

「うん、ありがとう！それで、まずはグループの先生役なんだけど、この表を見て欲しいの」

そうして指さした、ホワイトボードの紙。

朝星之宮先生が置いていった、この間の小テストの順位表だ。

上から伊王野美颯、神崎隆二、一之瀬帆波、浜口哲也、安藤紗代と続いている。全員が85点以上で、授業の様子を見る限り、先生役にふさわしい5人だ。

「私を含めて上から5人。このメンバーでみんなの先生役をすることにしようと思うの。平均点より上の人にも多少手伝ってもらおうかなって考えてる」

「ああ。問題ないんじゃないかな。グループ決めはどうするんだ？」

「うん。いい質問だよ浜口くん。グループ決めは、とりあえず上から番号順に決めようと思うの。仲いい人たちで組んでもいいんだけど、勉強会にも緊張感が欲しいからこうしようと思うんだ。みんな、どうかな？」

帆波の丁寧な説明に異論はひとつも出ない。

そのあとはグループ決めをして、夜に先生役だけで場所や時間を考えることとなった。

一通り説明を終えた帆波が話の主導権を俺に戻す。

「ありがとう、帆波。さて、これから確認するのはクラスの向く方向、これを明確にしておこうっていう話だ」

教卓の上に立つ。

「4月だけでもわかったように、この学校は予測もつかないような方法で俺たちの実力

を測る。今回は推理だったが、いずれそれ以外の要素を調べるものも出てくるだろう。実力とはひとえに学力だけを指すものではない。定期テストの他にも、そういった試験のようなイベントが起きる可能性もある」

「学力以外の能力を測る試験か…」

「まあ、心の準備をしておこう。そういう話だ。今日ここで話をつけたいのは、みんなとの意志の確認だ。——皆は、Aクラスに上がりたいだろうか？」

反応は劇的だった。たった80点で差ができるのはおかしい、悔しい。俺たちならAクラスに登れる。この学校に来たからには特権をつかみたい。特権に興味はないけどお金は欲しい。

「そうだろう。なら、俺たちに必要なことは2つ。自分の能力を駆使して、一つ一つをしっかりとこなしていく。そして、できるだけ自分の頭で理解することだ。俺も自分で理解したことをみんなに共有するけど、みんなの視界で噛み砕いたことで、みんなのできることの幅が広がる。戦略が、切れる手札が増えるんだ」

力強い瞳で俺を見つめる生徒たちに、言い聞かせる。彼らは俺の忠実な駒だ。彼らを活かすも殺すも俺次第。そして、彼らの努力次第で彼ら自身の価値は変わる。

「まずは今の状況。ほかのクラスも作戦を練り、クラスのとるルートを決めている頃だろう。日々気を引き締めるとは絶対に言わない。——違和感や疑問が芽生えた時に、

そのままにしないで考えることが今取れる最前の手段だ」

要は、ほかのクラスの動向を見貼ろうと言うもの。受け身ではあるが、彼らのとる手段を明確に捉えるのだ。

そして、最後に必要なのはメンタルの調整。彼らのモチベーション管理も非常に大事。

「そして、刺激的な日常を、みんなで精一杯楽しもう」

いつせいに声上がる。男子は掛け声を上げ、クラスは拍手に包まれた。

最後に、クラスに団結の火が点ったのだ。

その光景をニンマリと心の中で微笑んで眺める。本当に気分がいい。

これから本当に楽しくなるだろう。それこそこの学校に入った甲斐が有るというものだ。

一歩

5月2回目の金曜日。

あまり根を詰めすぎではいけないということで遅らせていた勉強会は、テスト2週間前になった今日から始まった。

学校側も調整を行ったようで、新しくテスト範囲も更新された。大幅に変わっており、5月1日から自主的に勉強会を始めていた生徒たちは非常にやるせない表情をしていた。

しかしながら、以前配布されたテスト範囲表のものとはだいぶ違う範囲が記載されている。

手元の用紙を一通り眺めながら、改めて疑問に思った。

2週間でどこまで対応することができるか、それを試すといった感じなのだろうか。いまいち掴み切る事ができない。

カンニングのようだが、先輩にカマをかけるしかないだろうか。ある程度プライベートルポイントを出せば真実を教えてくれる可能性は高いが、それにリスクが伴うし、俺のプライドも許さない。

それに、毎年同じ方法で実力を図っているとも限らないだろう。

教育現場の遅々とした対応は、毎年決まった年間スケジュールが前年度には生まれ、新たなことを取り入れにくいところにある。国指導のこの学校なら、毎年臨機応変なイベントを実施できるようにしていてもおかしくはない。

あるいは、生徒会が決めていたりもするのだろうか——？

上手いこと結論にたどり着けない。

情報が断片的に集まっている感じはするのだが、決定的なひと押しが足りないのだ。

帆波が正面突破を考える代わりに、俺や隆二で隠された意図がないか模索する必要がある。既に違和感を感じている時点で、甘んじることは許されないのだ。

「ね、美颯くん。この問題の解き方もいちど教えて？」

「ああ。こっちは——」

今は勉強会の時間。あまりほかに思考をさく訳にも行かない。彼らの基礎学力を効率よくあげていく必要があるのだ。1人の教師、ひとつのクラスにおいて生徒の数は10—20人がもつとも効率的である。今の8人というのは、それには及ばないものの授業に比べればはるかに教えやすいはずだ。

放課後の図書館。その他にもいくつかの場所に別れて勉強会を開くBクラスは、5時から6時半までの1時間半を勉強会に費やすことに決めた。

参加は任意で、部活に参加したい人はそれで構わないようになっていいる。が、テスト1週間前になってからは部活も休んでもらって全員参加を強制する予定だ。

勉強会を組織的に開くというのはどこも同じ考えのようで、この図書館にもAからDまで全てクラスが存在する。

Aクラスは基本的に学力の高い生徒が多いためか、終始無言で自分の勉強を進めている。C、DクラスはBクラスと似たような方法をとるようで、学力の高い少数の生徒が学力の低い生徒に教える形をとっていた。

うちのクラスは赤点候補がまずいないために、ほとんどAクラスと似たような状況となっているが、C、Dクラスはそうもいかないようだ。

特に酷いのはDクラス。

以前颯から聞いた堀北という生徒がクラスメイトの世話をしているようだが、教わる側も、教える堀北自身も酷い。

教わっている男子4人のうち3人は連立方程式すら理解していないようで、時々聞こえてくる声に思わずため息を着いてしまいたくなるほどだ。

そして、それは堀北も同じ。しかし、彼女はそれを隠すことをしない。

表情を見ればありありと浮かんでいる。失望の感情。

放たれる言葉はトゲトゲしく、一切の容赦のないものだ。

確かに、周りから嫌われる理由も察してあまりある。彼女はコミュニケーションが相当苦手のようだ。

「……美颯くん。なんだかあつちのクラス、すごい不機嫌なんだけど」

そして、彼女らのイライラは伝播してうちのクラスにも伝わってくる。

となりのこずえも気づいたようで、心配そうにDクラスの惨状を見つめていた。

「ちよつと声うるさくね？ 注意した方がいいんじゃないの？」

机の端で勉強する男子も多少迷惑そうに顔をしかめる。同じように、俺を囲むように座る女子も何度も頷く。

「……まあ、あまりほかのクラスの事情に顔を突っ込んでもいいことは無いさ。それに、どうせすぐに解散するだろ」

そうして、10分が経過する。

須藤と呼ばれたガラの悪い男がブチ切れた。

さつきから彼へと罵倒を浴びせかけていた堀北の胸ぐらを掴んでいる。

「あなたは愚か者よ」

「てめえ……!!」

一触即発だ。おそらくバランスの役目になつていた櫛田は、止めようにも須藤の腕っ節近づけないようだ。教えられている他の4人も止められないだろうし、止める様

子すらない。

唯一須藤を止められそうなモブ男子も、どこか傍観するようにことを眺めている。一応咄嗟に割って入れるようにはしているのは、何となく気配で伝わった。

「……不味くね？伊王野、止めた方がいいんじゃないか？」

「いや、俺が割り込むとより面倒なことになる。それに向こうにも止められる人材はいらさ。万が一にも怪我をすることはないだろう」

入学から2日目に見た、Dクラスモブ男子。名前すらまだ知らないが、近くで見れば相当腕が経つことがわかる。ガタイのいい須藤にも対抗しうるだろう。見た目以上の情報を引き出すことはできないが、見た目通りであれば相当武道に精通している。

しかし彼自身争いごとを好まないのか、動くような気を一切堀北たちに見せない。その上彼女たちからも腕っ節を期待されているわけでも無さそう。用心棒という訳ではないのか。どうにも自分の実力を隠している可能性がある。

まあ、あまり俺には関係の無いことだ。頭脳のレベル知ることが出来れば、彼の暗躍の可能性もはつきり見えてくるのだろうが。

結局、その場は教わる側男子4人が去ることで収まり、残った3人もすぐにその場を後にした。

「なんてゆーか、不良品がDクラスに集まるって話。あれみるとまじなんだなーっ思っ

ちやうわ」

「だよねー。あそこに桔梗ちゃんが混ざってるの、可哀想でしようがないんだけど」
「ねー。榎田ちゃんうちのクラス来ればいいのに。絶対ピッタリだよ」

小声で思い思いに話す。

まあ、あれは擁護できない。

この前洋介に伺った話だが、5月1日のクラスの状況は惨憺たるものだったらしい。茶柱先生が呆れたように真実を話し、何とか体制を立て直そうと放課後の話し合いに参加してもらおうと生徒に声をかけても、高円寺、須藤、そして堀北には一切取り合ってもらえなかったという。

高円寺は問題ないのだろうが、須藤と堀北。今日の様子を見るに相当扱いづらいはずだ。

しかし不思議なのは、堀北が先生役で勉強会を開いていることだ。

平田からは何も聞いていないが、あの様子を見る限りクラスのために手伝ったという感じは感じられない。

おそらく個人としてAクラスに上がりたい思いから、とりあえずという気持ちで開いたのだろう。

他人の俺が言うことではないが、実に考えが浅いし覚悟ができていない。

洋介は本当に大変なクラスに入ってしまったものだ。

まあ、そんなことはさておきうちのクラスの勉強だ。

彼らDクラスが落ちてくれることで相対的にBクラスのクラスポイントは上がる。

6時半まで勉強会を続け、その後寮へと帰宅した。せっかくこずえと遅い時間まで残ったこともあり、部屋に招く。

彼女が自分の部屋に戻ったのは、次の日の放課後だった。

「幸せ」

甘い声で囁かれる。

誰にもない俺の部屋。

1時間をかけた別の個人授業が終わり、今はゆっくりピロートークタイムだ。

まだ寝るには早い時間だが、お互いに抱きしめあつてベッドに寝つ転がつている。

こずえの体をなんとはなしにまさぐりながら、俺は自分の審美眼に感謝する。

やっぱり女バスは最高だった…！

抱き心地が今までのものと一線を画している。まだ片手で数える程しかしていないが、まだまだ味わい尽くせるな。

2人でいる時はベツタリと甘えてくるようになったこずえの唇を啄み、もう一度抱きしめる。

「ね、ね。カップルランキングって知ってる?」

「……聞いたことないな」

「女子たちで勝手に作ってるランキングのひとつだよ。他にもイケメンランキングとかモテ男ランキングとかもある。どっちも美颯くんが1位だよ?」

「へえ、そりゃ興味深いな」

面白いことを聞いた。男子のカップオッズ表には嫌な顔をするくせに、自分たちでは男子のランキングを作ってるという。まあ男子のは完全に下ネタだし、俺は満足してるから何も問題はないけどね。

他にも性格ランキング、賢いランキングなんてのもあれば、根暗ランキング、キモイランキングもあるらしい。ああ、なんて恐ろしい。

ちなみに性格ランキングでは3位。賢いランキングでも1位に輝いている。Aクラスの里中聡やDクラスの平田洋介も当たり前のようにいくつもランクインしている。

要は、付き合えた時にどれだけ自分の株が上がるか、そのわかりやすい表なのだろう。そう考えると、俺は間違いなくドラフト1位。高額取引されるのだ。大きな牌や肉感的なぼでいで取引されれば、さしもの俺も釣られるしかない。

カップルランキングとは、それらとは少し違った趣向のものだろう。

いわば『この男はあたしのもんだから!』と大々的に公表できる場所であり、『うんうん。あたしたちはあんたらを応援するよ!』と一気に株の上がつた女の子取り入ろうとする場所であるわけだ。

なんて言うか、ここまで考えると男子のオツズ表とは訳が違うな。子供がミニカーを自慢している間に、大人が外車で見栄を張って交渉の手段にしているのを見ている気分だ。

男女の精神年齢さここに極まれり。

「ああ。俺たちは間違いなく1位だな」

「うんーわたし、今一番幸せな気分」

とろけるような笑みで、今度は向こうから求めてくる。

そういえば。

第2ラウンドに入る前に、少しだけ事務的な話を済ませておこう。そう考えた。

「ひとつ聞きたいんだけど、いいか?ま、事務的な話だけど気楽に答えて欲しいな」

「うん。どんなこと?」

「ああ。こずえならテストで良い点をとるためならどういふことをする?自由に考えてくれないか?」

敢えてこんな時に聞くことでもないが、疲れている今なら頭を働かせることなく自由な発想が浮かぶはずだ。

最近はどうどん成績が上がっているとはいえ、こずえは頭が悪い方に入る。

そんな彼女がテストを乗り越えるためには、どういうことを思い浮かぶのかを知りたかつたのだ。

星之宮先生は、『プライベートポイントの謎に早くから気づいた俺たちなら』中間テストも難なく乗り越えられると言っていた。

つまるところ、隠された仕組み、正攻法以外の方法があるはずで、今回も俺たちはそれを突破できる——星之宮先生はそう言いたいのだろう。

それがなんなのかいくら考えても、上手く行動に昇華できるものが出てこない。

故に、一旦思考停止して他の考えを拾いたい。

俺とは違った視点をもつ生徒——例えば、勉強ができない生徒ならどんな考えが浮かぶのか。

それを調べるために、こずえに話をふった。

「テストでいい点か……。私は、このままずっと美颯くんに教えて貰えたらそれ以外何もいらない。でも、そういうことじゃないんでしょ？」

こずえの言葉に頷くと、少し考えるようにして——。

「職員室に侵入してテストをかつさらう。答えを先にゲットする。こんなところかな」
うん。実にいい応えだ。まさに勉強の苦手な生徒の考えることだな。

しかし、それは俺も浮かんでいたことだ。

予め問題を知っておくことや答えを知っておくこと。どちらも先生と交渉出来れば手に入れられるものだが、まさかそれで入手できるほど甘くは無いはずだ。

『この学校で、プライベートポイントポイントで買えないものはない』。どの辺まで適用されるか試したことはないが、さすがに厳しいはず。

しかし、予め問題を手に入れるという線くらいしか、今のところ具体的な対策は浮かんでいない。

何かネットで入手出来るような問題を参考にしているのか。それとも大学入試から引つ張ったりする可能性も——。

そうか。数年分過去問を手に入れられれば、その傾向やあわよくば答えまでたどり着けるかもしれない。逆算の寸法だ。

「こんな答えでいい？」

「ああ。ありがとう。ひとつ考えが先に進んだよ。——さて、ありがとうの2回戦だ」
夜は長い。

☆

結論から言えば、大当たりを引いた。

「間違いない、去年もその前の年のテストも全く同じ問題が出題されている」
「ちなみに帆波が貰ってきた小テストも去年と問題が変わっていないな」

昼休み。

俺と隆二は時間が惜しいとばかりに教室でコンビ二弁当をつつきながら、数枚の紙を見比べていた。そして、そのどれもがテストがテスト関連の用紙だ。去年、一昨年の一学期中間テストの問題用紙に解答用紙。そして去年のと、この前の小テストだ。

今朝、プライベートポイントとデート1回を使って取引した過去問を手に入れ、まさかと思って帆波に去年の小テストの取得を頼み込んだ。

生徒会と繋がりを持ち始めている帆波は、どうやら連絡してすぐに南雲先輩からテストを手に入れたらしく、今日の昼休みには渡してくれたのだ。

そして、それを隆二と共有し、わかることを推理していこう。そんな話となっているのだ。

「すると、今年の間テストもこの問題がそのまま出る可能性が非常に高い」

「そうだろうな。星之宮先生の言葉、小テストの違和感にもこれで決着が着く」

出題の傾向を探ろう。

そんな考えから導かれたのは、とんでもないものだった。

去年と一昨年のテストの問題はまるつきり同じで、小テストも去年と今年で一言一句違わない。

「この問題の答えを配つちまえば、全員が100点取れる試験じゃないか」

そんな、テストというかたちすら放棄しような、生徒へのなぞかけだったのだ。

「ああ。だが、今日ポンと出す訳にはいかない」

「わかってるさ。今のやる気、勉強会をキープさせる。テスト3日、もしくは2日前に過去問として配る。——あるいは、答えの丸暗記を強制する」

どちらを選んでも、その先へのメリット、デメリットが存在する。

少しの差で丸暗記だろうか。

せつかくのクラスポイント上昇の機会。みすみすAクラスに渡すわけにはいかない。

向こうも同じ作戦をとると考えても、理論上負けのない試合となるのだ。次回以降同じようにクラスポイントが上がるとも限らないため、取れるところで確実にとっていくべきだ。

「丸暗記だ。クラスポイントが次回以降も同じように上がるとも限らない。確実な手を
選ぶ」

「俺も同じ考えだ。その辺の説明は任しいいな？」

「ああ。テスト2日前だ。万全を期す。それまで勉強会は続行だ」

「それがいい」

話は転がるようにまとまった。鷹のような目に炎をらんらんと宿らせだ隆二は、確認
するように頷いた。

テストまで残り10日。

決戦の日は近い。

☆

テストは滞りなく進行した。

予想通り、過去問とテスト内容が全く同じだったのだ。

2日前の過去問配布も功を奏し、ほぼ全員の生徒が満点の自信があるという。

テストが終わりこずえに聞いてみたが、丸暗記は上手くいったらしい。既に夏休みのこと話を話題にしていた。

土日を含み、ついに結果発表の日が来る。

話を聞く感じはほぼ全てのクラスが過去問の謎に気づいたようだった。どのクラスにもそれなりの知者がいるのは間違いないだろう。

いずれ他クラスと明確に戦う試験も出る可能性が否定できない以上、ある程度内情調査が必要だ。

今日は時間通りに現れた担任を見て、若干クラスの雰囲気が出る。

「先生昨日は飲まなかったんですか…。」

「じゃあ、負けたのかなあ…。」

一気に弱気になった。以前の『優秀だから嬉しくて呑んだ！』発言が聞いていて、呑んでこなかった今日は敗北の可能性が高い。そんな分析だ。かつてこんな先生がいた事などあるだろうか。アホなんじゃないだろうか。

「違う、違うのよみんな！結果もそうだけど、先生が生徒たちの成績で呑んだり呑まれたりするわけが無いでしょ？」

「どうだか」

「てゆうーか千恵ちゃんせんせー。さっさと見せてー！」

「無邪気な声が胸に刺さるわ…」

ダメージを受けたように豊満な胸を抑えてたじろぐ。

しかし、生徒たちの『早く結果教えてよ』という冷めた視線に耐えられなくなり、憮然とした顔で一枚の紙を取り出す。

「もー。結果が気になるのはわかるけど、少しは乗っつけてくれてもいいのに」

ブルーたれながらホワイトボードに大きな紙を貼り付けた。

生徒全員の視線が集中する。まずは自分の得点が気になるのだ。

各教科ごとに名前に順位、そして得点が載せられている。

血眼になって自分の名前を探すクラスメイト。ようやく安心したように誰かがため息を着いて――。

「よっしや満点だ!!」

「あたしも!」

「こんな点数初めて取ったぜ」

全員が歓声をあげた。

ホワイトボードの紙の数字は、9割以上が100点で占められていた。無論赤点もいなければ、全員が80点以上に収まっていた。

かく言う俺もすっかり全ての教科で満点を撮っている。そして、そんな生徒もクラス

の半分を占めているのだ。

策がうまくはまり、結果として最善のものを出せたはずだ。

しかし、一部の生徒の顔はまだ緊張している。

それもそのはず。5月の初めに誓い合ったように、俺たちが目指すのはあくまでAクラス。学年でクラスがどの位置にいるのか。そこが今回の最終的な結果だ。

「知恵ちゃんせんせー」

「わかつてるわよ。4位から順位に発表していくわね」

そして、四位と三位を適当にチャチャツと書いた。あまりにも風情が無さすぎるが、俺たちがしているのはトップ争いに違いない。1番気になるのは1位2位がどっちかなのだ。

4位はDクラス。平均点は82点。

3位はCクラス。平均点は87点だった。

どちらもテストの謎掛けにすっかり気づいている。あとの差は基礎能力の違いだろうか。こう見ると、全体的な能力もAからDにかけて低くなるように配属されているとはつきりわかる。

そして、注目の上位争い。

1位をとって、今の流れをさらに加速させたいところだ。

それに、ここで負けてしまえば基礎能力の差というふうには解釈できてしまう。

俺たちの方が低いんだ。そう知ってしまえば今の勢いは多少なり減るだろうし、これ以降の正面対決で劣等感がまとわりつく。

大事な勝負だ。ここでその不安を払拭したい。

「ではではー。1位の発表ですー！」

誰も何も言わない。ただゴクリと唾を吞んで、ひたすらにそのときを待った。

——まあ、星之宮先生がこんなことをしている時点で、察してあまりあるものだったけど。

「1位はBクラス！平均点は98点!!」

「うおおおおお!!」

「やったああああ!!」

目標は達成した。

「…ふうううー」

「美颯くん、おつかれさま。隆二くんも」

「よかった。美颯、大きな一歩だ」

大きく息を吐いて椅子からずりおちる俺に、紗代と隆二は口々にねぎらいを言う。

「ありがとう。ああ、大きな一歩。大きな前進だ」

先生がみんなのテンションを遮らないように、2位の結果をこっそり書いていた。Aクラス。93点。

大きく差ができたもんだ。ここも同じように過去問を使っただろう点数になっていくから、おそらく何人が足を引っ張ったのだろう。

あとで大掲示板に点数を確認しに行く必要があるだろう。

そして、あと片付けまで全部終わってから、勝利の美酒を存分に味わう祝勝会だ。

☆

職員室下の階。昇降口の近く、されど生徒が減多に通らない場所に大掲示板は設置してある。

学年ごとに、中間テストの結果が掲示され、学年全体の平均点から個人の点数まで細やかに載せられているのだ。

中学校ではなかった、出来なかったシステムだが、この学校ではそうもいかない。非常に重要なひとつだ。大きなクラスを動かすには、小さな生徒一人一人を細やかに動か

すの必要になる。

それが、敵だろうと味方だろうとだ。

「他の学年は平均点が高くはない」

「うん。こんなテストもこれつきりってことだよな」

「まあ、正直最後のチャンス、って言う感じがしたな。次からの定期テストは学力の独壇場になるし、生徒が赤点をとって退学する可能性も増える。——覚悟しとけよ、って言葉が伝わるようだ」

つまり、次の期末テストからは、俺たちのクラスはAクラスと正面切って戦わなければならぬ。純粋な学力で勝負が決まるということだ。

それに、今回のテストではC、Dクラスとの明確な実力差も測れていない。ひとまず夏休みまでは気を抜けないということだ。

——しかし、今回である程度浮き彫りになったこともある。

「Aクラスの数人だけが、明らかに過去問を受け取っていない」

隆二の言う通り、Aクラスには数人だけの教科も満点を取れてない生徒が存在する。

戸塚弥彦という生徒に至っては、平均して70点未満。明らかに足でまといだ。

「確か、Aクラスってふたつの派閥が勢力争いしてるんじゃないか？」

「ああ。坂柳派閥、そして葛城派閥だったはずだ」

そして、全て満点の坂柳有栖に対して、一教科しか満点の取れていない葛城。二派閥の競走は、今回の結果をもって坂柳派閥に振れるだろう。

坂柳は過去問に気づき、葛城は正攻法で挑んだ。

実に見た目通りの結果になったわけだ。

「坂柳有栖。そのうちAクラスをまとめて動いてくるんだろう。今から注意するべき生徒だろうな」

隆二も帆波もそれに賛同し、その場を後にする。

写真を取つてあるため、あとで参考程度に確認することにした。この後はBクラスの祝勝会。30分後に銀だこに集合するため、この辺で頭を使う遊びは終わりにしておく。

3人で昇降口までの道を歩いていると、向こうから似たような3人組が歩いてくるのが見えた。

紫色の長髪に、冷たい表情を携えた女子。

金髪をオールバックで後ろに結ぶ、中背でなにか企んでいそうな笑みを浮かべる男。

そして、薄い水色に染めた髪に黒いハンチングを被り、薄く、しかし堂々とした微笑みを浮かべながらこちらを見つめる美少女。

杖をつきながら、後ろに2人を従えて歩くのは坂柳有栖その人だ。

俺達も、坂柳たちも数歩の距離で立ち止まる。

口火を切った。

「こんにちは、坂柳さん。そして橋本くん、神室さん」

「知ってたのかよ」

驚いたように金髪——橋本がつぶやく。同様に神室も、なにか見定めるように俺を見つめている。

「そうでしょうね。私たちを含め、他クラスのめぼしい人物をそれとなく探っているのは、すぐに気が付きました。初めまして。坂柳有栖と申します。伊王野美颯さん」

そうして、俺の隣のふたりにも目をやった。

「それに、神崎隆二くんに一之瀬帆波さん。——一之瀬さんは、数日ぶりですね」
「うん。元氣そうだなにより、だよ」

2人には面識があるようで、お互いに優しく微笑み合う。ただ、帆波の微笑みが友達に向けるものであれば、坂柳が帆波に向けるそれはペットを見るようなそれだ。

表情に感情を投影しない分、彼女は瞳や視線に色が付きやすい。そう感じた。

「さて、せっかくの場です。クラス平均点の学年1位獲得、おめでとうございます。そして、非常に感謝をしていることも申し上げておきましょう」

「どういふことだ」

「簡単なことですよ、神崎くん。あなたたちのおかげで、スムーズにクラスの統一が進みそうです。私には言葉でクラスを扇動する力はありませんが、結果で従える力なら持ち合わせておりますので」

言葉の合間に俺をしつかと捉えている。今この瞬間も観察しているのは用意にわかった。

同時に、彼女がそれなりに興味を持っているのも。

「楽しみにしてなよ。俺も、楽しみにしてる」

「ええ。——あなたには期待していますよ」

そう言い放つと、彼女たちは振り返って去っていく。

なるほど、俺たち、いや、俺が各クラスの内部を探っているのを知って、ここに現れるのを予測していたわけだ。

なかなか食えない女だ。実に食いたくなる。

運動できない体と言うのが実にもったいない。

だが、だからこそ楽しめる。

純粋な思考力の勝負ができるのだ。こんな機会は滅多にないだろう。

来るAクラスとの全面対決に心を震わせながら、俺たちは真っ赤な空のもとに出た。

とりあえず、今日は。パーツと騒ごう。そして、また今日から戦いを始めるのだ。